

地下水道

(吶喊改題) 6号

24時間をかけた政治警察との斗いに
勝利し、革命の「党一軍」の建設を！

- 救援会結成の辞
- 獄中被告団アッピール
- 獄中斗争の書簡
- 人工衛星

FG(正規軍)駿士の
地下活動—獄中斗争の記録

70/12/10

関西救援会

噴の州涼

王翰

葡萄の美酒 夜光の杯

飲まんと欲すれば琵琶

馬上に催す

酔うて沙場に臥す

君笑うことなけれ

古来征戦 幾人か回る

うまい葡萄酒を

夜光るといふ玉のさかづきについで
いざ飲もうとしたら

馬上でひく琵琶の声が聞こえてきた
酔いしれて砂漠の中に倒れ臥しても

君よ、笑つて下さるな

昔から遠い戦場に出かけた兵士のうち

無事に生きて帰れた者が幾人あるだろうか。
せめて、酔つてもなけりや
やりきれないのだ。

特集号によせて

「地下水道」

（内訳）
改題6号

全国の革命的労働者、学生、市民のみなさん、関西救援会機関紙 地下水道（内訳改題6号）をお送りします。今年5月救援会発足以来約半年、多くの同志、救援会々員のみなさんに「内訳」を通じて不当にも権力にとらわれた『RG』「反帝戦線の若き戦士」への救援活動、援助をいただき関西救援会事務局はここに感謝の辞を述べたいと思います。

さて今日、救援会活動は、全共斗運動の解体、大衆武装斗争の一途の後退をもって極めて流動的状況を示しているでしょう。それはとりもなおさず革命党の建設段階に規定され救援活動が裁判斗争や日々の差し入れという内容から「蜂起にむけた陣型構築」という目的意識性のうちに「武装組織を支える救援会建設」をはらむことを余儀なくされ当然にも党の飛躍と同レベルで取り扱かれるようになつたからです。関西救援会はそのような具体的な要求に答える作業に一日もはやく着手せねばならないとし約半年間の活動を次のように総括し、全ての同志、会員のみなさんの協力と、活動への参画を期

次

目

特集号によせて	村越 真介	2~3
救援会結成の辭		
堡壘を築け	小野寺 晋	4~6
獄中被告団アッピール	2・14 斗争被告団	
	R G 破壊戦斗争被告団	7~14
獄中斗争の書簡	大森 昌也／久留島 純一郎／（獄中へ）添島 徹 (獄中へ)一活動家／河本 邦江／山本 哲昭／ (獄中へ)救対部／浜田 則男	15~34
治安警察との斗争に勝利せよ	添島 徹	35
共産同弾圧対策委アッピール		38
特別手記 『人工衛星』	大森 昌也	42

待します。一、武装組織と確立された『RG（正規軍）』に対する政治警察の弾圧を積極的に大衆的に暴露することが出来えなかつたこと。これはとももなおさす陰謀としての軍事、蜂起の為の目的意識的地下活動、組織を大胆に推し進める働きかけを救援会として宣伝、煽動してこなかつたことにあるのではないかでしょうか。次に二としてRGや赤軍派や京浜安保共斗やアナキストに個別に或いは秘密裡にかけられた治安警察の攻撃を把握することが不可能であるという現実に規定されて革命党の組織内容、基準、体質に至るまでの批判反批判を一般的な政治、組織路線の批判としてしか展開出来えず、『救援会の在り方、党と救援会の関係、既存の全共斗救対、最も献身的な市民救対』に対する働きかけと同時に救援組織をめぐる論争を組織して日本の革命運動の総体をどのように変革すべきなのかという実践的課題を提出することに無自覚ではなかつたのではないでしょうか。関西救援会は機関誌改題『地下水道』ふさわしく今後は一切の武装斗争、武装組織が経験し獲得した救援会、革命的個人と共同し連帯し人民の大海上奥深く地下水道、地下組織兵站建設の為に全力を尽すでしよう。

最後にこの特集号は全国の、津々浦々にある救援組織、武装組織に対して我々の細々と続けられたこの半年間の活動をリアルに報告し批判と協力と交流を求めるがために発行されたものであることを明らかにしておきます。

救援会結成の辞

築け
日本を

小野寺晋

全ての同志達、仲間達へ権力の全ゆる彈圧に屈せず、私達の斗いを無限に発展させていくために、そして革命の日まで続けることのない救援組織を建設するために結集されることを呼びかけます。

私達の斗いは敵ブルジョア政府に対する公然たる権力のための権力争奪の斗いであり、他の犯罪事件やいわゆる社会問題というごときものではない。この眞実を、労働者・農民・市民が知ることを最も恐れるが故に、私達にありとあらゆる悪辣な下劣な中傷を試み、なおかつ最も自己犠牲と献身性を身に備えた勇者を、最も現実の矛盾に変革を挑むすぐれた魂を抹殺せんとするのである。

私達の惡事とはいかなるものだろうか。法廷に於る裁判長の背後に治安警察があり、自衛隊があり、ブルジョアジーの迫害を許さない支援を持つことが必要なのだ。冷たい牢獄で眞実を恐れず、自らが為したことを持ち上げて、忍耐を持って斗いを持続している。

また今後の斗争の中で作り出さなければならない。ベトナム解放戦線の兵士達は、仲間の死体を真先に守ると聞く。これこそが救援活動の素晴しさであり、不死鳥のごとく革命斗争の前進を続けている重要な一つの環に違いない。「一人が万人の為に、万人が一人の為に」という言葉は今私達にとって、「世界の革命斗争にいつでも急ぐことができるか」として問い合わせられる。そしてそのことは資本主義社会を根底から壊りくずす為に、階級社会の否定者、反対者は、一方に於ける政治斗争の前進と、一方に於る市民社会の奥深く斗う者を守り、傷つく者を援護し、権力の野蛮、酷烈な弾圧をはねのける網の目を増大していくこととして現実に迫られている。

七〇年代階級斗争の堡壘を築こう。権力斗争の土壤を更にしつかりと固める為に、敵権力の弾圧を細事にわたって許さず、孤独に斗う者を敵によつて駄目させない連帯を保障しよう。資本家の手先＝検事、裁判官は既に安保斗争の過程で数十名に及ぶ同志を不当に有期懲役を求刑し、今火ぶたを切ろうとしている七〇年代階級斗争に対し、狂人的に労働者、学生、農民の血を欲している。だがしかし、今まで未来社会は我々のものであり、いかなる弾圧をもつてもプロレタリアートの内部の革命性を駆逐することはできない。我々は敵の恐怖政治の中から自立性と柔軟

同志にこそ最も熱烈な連帯と信頼と友情が保障されなければならぬ。私達の「惡事」は隠然と権力によって秘密の内に消されていく。裁判こそ警官、検事、判事等が暗黒の内にプロレタリア兵士を断罪しようとするものである。「誰に対しても何を憎悪しても惡事を為したことか」を、ひたすら隠し続けるために。

歴史は階級斗争の歴史であり、それはほとんど無名のすぐれた労働者・農民の英雄的斗いによつて荷なわれてきた。未来社会に生きる者と、腐敗した社会を維持しようとする者との熾烈な攻防は數かぞえられないほど存在する。

しかし、素晴らしい斗いはど同志や仲間の愛は固く、一つの明日の為に無数の魂と個性が融合していることに気づく。そして、そこの団結はある時は静かに、ある時は怒涛のように、敵権力ブルジョアジーに對し最も力強い武器として役割を果すのだ。

前線と後衛、合法と非合法、戦士と救対等々の調和こそ私達も

性を養い、一步一歩着実に前進し、資本家の城、市民社会を人の石垣によつて侵襲し、堡壘を築いていくのではないか。それを持つ事によつて墓場の法廷は炎になり、もし例え「壁」を背後にしても、澄みきった平静さと、なおかつ神聖なパトスを持ちえる兵士を続々と生み出すに違いない。

かつて、そして現在でも救援活動は限定され、それも旧いブルジョア諸關係に依る色彩を強く残し、そこにある友情や愛は過去のつながりであり、明日に向けたそれではありえない事を認識し、個別性を普遍へ、分散を有機的な連絡と機構を組織する事を開始しなければならない。斗いの前進は必然的に犠牲を伴う。我々の勝利は、敵権力から「くたばりやがれ」と殴打され、流れ出た血の海の中に転っている同志達の斗いによつて積みあげられるのだ。

とだけは、決して犯してはならない我々の義務である。

同志諸君、すでに斗いは革命斗争に向つて、退くに退けないとこころまで前進した。団結は「闘一」でも「押しつけ」でも「強制」でもない。この邪悪にさしむ社会と人間の悲しみでしかない体制を打破し、一人一人の願いをこめて、生命を賭けて私達の全世界を獲得する為に、その一步一歩…、無限の飛躍に踏みこんでいくではないか。

隊でもって、同志社大学に向つた。我々の強固に意志統一された部隊に恐怖した赤軍派は、わずか二十名の部隊でもってゲバ棒と空ビンで攻撃してきた。これに対し我々はただちに反撃し、文字通り一撃で彼らを完全に粉砕した。

この党派斗争が「軍事を組織する」ことをめぐるものであり、我々がこの斗争に勝利することにより満天下に我々が「軍事を組織する党」であることを明らかにした。この我々の勝利に恐怖した権力は、この党派斗争に介入し、我々の同志二十八名を逮捕し、その内十名の同志を起訴するという暴挙に出でてきた。さらにこの斗争をキッカケにして、権力はBUND特捜班を組織し、徹底した攻撃を我同盟とRGに対し恒常に加えてきている。具体的には、我同盟の幹部とRGに対し、幹部、RGであるという唯それだけを理由に「二、一四斗争参加者」として逮捕、起訴するという攻撃である。この数は逮捕者九名、起訴者六名、他に追起訴者二名に上っている。

〔2〕弾薬輸送列車阻止斗争

昨秋安保決戦は我々の主体の未成熟ゆえに敗北せざるをえなかつた。これに対し、日帝はただちに「日米共同声明」路線の具体化として、我々に攻撃をかけてきた。それが昨十二月の弾薬輸送列車運行であった。

都地検の「大森氏は共産同RGの隊長であるから保釈は不適当である」という理由の準抗告をほぼ全面的に認め、公安事件として

は二番目に高い「現金六十万円」という高額をかけてき、実質的に保釈を認めないという弾圧をかけてきた。我々はこのような國家権力の攻撃を許すわけにいかない。断乎斗つていきたい。

〔3〕反レッド・ページ斗争

六十九年四、二八斗争以来、急速に（反戦派）労働者に対して、電通を中心としてレッド・ページ攻撃がかけられてきている。この労働者に対する攻撃の最先端を担つててきた電々公社に対して、本年一月二十一日寝屋川電報電話局を時限火炎装置をもつて攻撃した。これがこの反レバ斗争であった。

この反レバ斗争は、今までの反レバ斗争が、労働者の「権利」防衛であったのと異なり、労働者に対するブルジョアジーの攻撃に対して、階級的報復をえたものであった。このことが、この斗争の最も革命的な理由であり、権力がこの斗争に恐怖して、狂氣じみた弾圧を加えてきた理由である。

この斗争に対する弾圧で、不幸にも、六名の同志が逮捕され、起訴されるに至った。

〔4〕強制収奪斗争

この斗争は本年二月、RGの斗争資金を得るために、滋賀県下の

「この「弾薬列車」に対し、他の全ての新左翼諸派が、単なる政策反対のカンパニア斗争しか組みえない内にあって、我同盟のみが唯一七〇年代の政治基調!!「帝国主義軍隊解体、全人民武装」を明らかにするものとして組織した斗争であった。

まさにこの斗争が、武装斗争の質を有していたが故に、権力はこの斗争に対し、破防法の「暴力主義的破壊活動」の構成要件の一つである「電汽車往来危険罪」という重罪（二年以上有期刑）を適用してきた。このことはまさに、権力がこの斗争をいかに重視しているかを表わしている。又このことは我同盟に対する破防法の団体解散を目指した伏線と考えられる。

この斗争は具体的には、一つは京都の山科に於て、弾薬列車の通過直前に火炎ビンを投下したものであり、他の一つは神戸の山陽本線に火炎時限装置をしけけ、発火させ、列車を数分止めたものである。

斗争後約三ヶ月後の本年三月二十三日に山本、久留島両同志が、

京都の斗争参加者として逮捕されたのを始めとして、京都の件で五名、神戸の件で三名逮捕され、全員起訴された。今なお、山本同志を始めとして、三名の同志が獄中につながれている。早急に、彼らを奪還したいと努力しています。尚、権力—京都地裁は、我々がなした大森昌也同志の保釈請求に対し、まったく不当にも京

である。

（ブルジョアジー＝収奪者の）別荘から物資を強制収奪したものである。

この斗争に対し、権力—マコミは、「私有財産を破壊する悪らつ非道な行為」「革命の名を泣く窃盜団」等々のありとあらゆる言辞でもって、私有財産制を擁護し、RGを「市民生活の破壊者」＝悪者＝窃盜団と印象づけようと画策した。しかしながら、我々の反撃でこれが功をそうしないと知るや、今度は完全にこの斗争が行なわれたという事実を庄殺しようとしてきている。

何故権力がこのような態度を取ったのか？それは、「私有財産制」が「賃労働制」とならんで、資本主義体制を支える核心だからである。この斗争はまさに「収奪者の収奪」であり「私有財産制の廃止」を目的とするものであった。これはマルクス主義の核心であり、我々はこれからも機会あるごとにこの斗争を行つていふことを宣言する。

我々は、以上の斗争でRG員九名を含む多くの同志諸君の貴重な血を流がした。しかしながら我同盟はこの政治警察との斗争の中できだえられ、「軍事を組織する」体系的非公然党としてよみがえりつつある。近いうちに体系的非公然党を強固に打固め、このRGを始めとする多くの同志の血を権力者の血でもつてあがなつてもらう事を宣言してこの報告を終わる。

権力の反革命攻撃の野望を粉碎し、

蜂起！臨時革命政府樹立へ向け、

恒常的武装斗争の

爆発的展開を勝ち取れ！

二・一四闘争被告團

七〇年代階級斗争はまぎれもなく全世界的規模をもつて急速に進行している現代過渡期世界がはらむ危機の性格が、世界唯一の世界革命戦争として発展し、その事をもって現代過渡期世界の根底的止揚としての世界プロレタリアート独裁の樹立を、現実的射程にのぼすべき歴史段階に到達しつつある事を、示している。

日本帝国主義足下における昨秋安保決戦は、反政府斗争から、政府打倒斗争、権力斗争として、質的飛躍を迫られた段階において、広範な大衆的武装斗争を実現しながらも、帝国主義権力の軍事力と、その陣型の前に、敗北を喫した。

日本帝国主義は、その侵略反革命戦略にもとづき、①日米韓合侵略反革命同盟の再編強化（日米安保条約の自動延長、日米共同声明、日韓合同委員会、日華協力委員会）、②産軍複合体（三菱、一四次防）、③自衛隊の帝国主義軍隊化（日米韓合同演習、沖繩構築をもつて、世界革命戦争を切り開き、世界プロ独樹立へ向けて、不退転の斗いが開始されている。

我々は、この七〇年代初頭における、恒常的武装斗争の展開を、蜂起！臨時革命政府樹立へ向けた勝利の陣型を鍛え上げる中ににおいて、必ず敵権力を解体せしめ、偉大なる内戦の時代を切り開くであろう。

この事は、何よりも帝国主義者自身がもつともよく自覚しはじめている。帝国主義心臓部における、武装蜂起が、いまやヨーロッパで米帝内部で、そして、日帝内部で、準備されはじめている。この事は、ブルジョアジーに極度の恐怖をもたらしている。我々は、この事を端的に次の事実によつて、知る事が出来る。

それは、昨秋安保決戦における治安戦略が、①共産同、革共同、に対する破防法攻撃をもたらし、②今年六月には、ハイナンックの赤軍派に同様、破防法を適用した事であり、③更には、昨年末に解体し、反帝統一戦線と八派政治の革命的解体再編を通して、蜂

日米共同侵略前線基地化、国内治安戦略の確定と、その部隊配置、治安訓練）、④機動隊の準軍隊化（装備、人員、広域化、イデオロギー教育等）、⑤治安政治警察の公然たる復活、⑥帝国主義的労働運動の構築（社共人民戦線派の体制内化、合法主義の純化と民社、公明、民労懇一同盟のヘゲモニーとしての登場）、⑥および国益、国防論、大国主義（GNP第二位、万博等）、ナショナリズム（沖繩、北方領土問題）、民族排外主義（出入国管理法国会再上程等）、⑦反革命暴力自警団の組織化とその保護、育成という日本帝国主義の侵略反革命の「陣型」の強権的導入（帝国主義的権力再編）を通じて、諸階級、諸階層の分解を押し進め（帝国主義派、人民戦線秩序派、プロ独派）それを国家行政権力をの肥大化と、軍事戦交路線の全面展開によつて集約せんと試みたのである。

確かに、昨秋安保決戦において、我々は左記の敵の陣型の前に敗北する事を通じて、我々が意図したところの、革命斗争の新地平への飛躍を勝ちとる事が出来なかつたとはいえ、敵権力は、その決戦の我々の敗北を、革命勢力の敗北、解体にまで押し進める事に失敗したため、今や我が同盟をはじめとした革命勢力、革命組織破壊転向強要攻撃であり、⑤小西三曹の斗いにみられる、軍隊内叛乱の始まりである。そして今や、⑥新四派（共産同、赤軍派、京浜安保共斗、アナーキスト）なるデッチ上げとフレームアップである。

まさに狂奔とは、この事である。ブルジョアジーの階級的報復戦がすさまじい速度で進行している。だがそのことは、ますます攻撃、および②一四を契機とした、YB-RGに対する組織破壊転向強要攻撃であり、⑤小西三曹の斗いにみられる、軍隊内叛乱の始まりである。そして今や、⑥新四派（共産同、赤軍派、京浜安保共斗、アナーキスト）なるデッチ上げとフレームアップである。

革命党、革命軍、革命家、革命戦士に対して、敵権力は血まみれになって、破壊攻撃、転向の強要、そして最後には、抹殺を決意しはじめている。それは、自らの恐怖のために。我々は、その事をいささかも不思議とは思わない。すでに我々は社会を実現するために、いやすうではない。ブルジョアジーを打倒するために。そして人類の未来社会を、社会主義、共産主義の社会を実現するために。

昨秋來の党派斗争、党内斗争の革命的推進をもつて、赤軍派の現状の代無政府主義を克服し、さらに、叛旗、情況派なる軍事反対派を蜂起し、反帝統一戦線と八派政治の革命的解体再編を通して、蜂

起、統一戦線を軸とした、蜂起の陣型構築に着手しつつある。七〇年代革命戦争を領導しうる主体的条件を着々と形成しつつある。我々共産主義者は、眞実を語る事を決して恐れはしない。いやむしろ、それを誇りとするものである。それは、その事の眞の力を理解するが故である。

もはや、二・一四事件の権力の攻撃の性格は、余りにも明瞭である。それは、七〇年代革命戦争の時代を貫く普遍的攻撃である。我々は、この反革命攻撃に対して、破防法公判斗争、小西叛軍公判斗争、と同時の質をもった斗いとして位置付けなければならぬ。

我々は我々の公判斗争を決してブルジョア民主主義としての日本国憲法のワク内におしこめてはならない。いやそれは不可能な事である。我々は、敵権力の熾烈な反革命攻撃に対しては、革命戦争の推進でもって答えよう。我々の法廷斗争に対する最大の武器は、革命戦争以外にはない。いや、法廷斗争は、革命斗争の一つの武器にすぎない。

我々は、ブルジョア法によつて裁かれるのではない。我々は、ブルジョア法を利用したところの、権力によって、階級的報復を法廷において、加えられるのである。我々は法廷において、世界プロレタリアート人民被抑圧人民の全ての名において、帝國主義

は、はじめている。確固とした自信と、勇気と希望をもつて、死を決意しはじめている。いや生命を惜してまでも獲得すべき未来に対して、しっかりととしたまなざしを向けはじめている。その様な人民に対しては、敵権力はいかなる方策もありはしない。ただ彼らは、底知れぬ、恐怖を知るのみである。



四・二八破防法、小西誠叛乱兵士弾圧裁判 ハイジヤツク赤軍派破防法に次ぐ 『第四の山田裁判』を

斗うにあたつて

山田弾薬庫輸送列車阻止斗争
統一被告団 アッピール

全国の革命的労働者、学生、市民のみなさん。恒常的武装斗争の新たな地平を切り拓いた山田弾薬庫輸送列車阻止パルチザン破壊戦争は、七〇年代に於ける革命党と党の軍隊の任務を唯一、蜂起＝臨時革命政府樹立＝内戦＝世界革命戦争への獲得へと確定し、一〇・八から昨秋安保決戦へと煮つまつた大衆武装斗争を維持し、拡大し、一切の武装組織と勢力を蜂起の陣型に再編させるべき内容を確保していたと確認できるでしよう。

さて我々統一被告団に課せられた階級的任務は、司法権力の裁きを甘んじて受け、あれやこれやと斗いの成果を発表し宣伝することではなく、ますなによりも、日本帝国主義の現在的な権力性格と実態＝官僚的警察的独裁を暴露し、敵権力打倒の為の目的意識的な党＝軍建設＝蜂起の陣型創出・正規軍建設・帝国主義軍隊解体斗争の一貫として斗うこと以外にありえないと考えます。当

然にも我々は、昨春四・二八破暴法攻撃、赤軍派に対する破暴法攻撃、小西誠叛乱兵士に対する弾圧裁判に続くものとして山田裁判を位置付けています。そうであるが故に第一に破暴法攻撃をはらむ電汽車往来危険罪なる罪状を粉碎し、革命党殲滅策動を徹底して粉碎し尽すことと、第二に破壊戦争を積極的に評価し、あらゆる武装組織が今後も斗い取る破壊戦争を防衛しなくものとして、第三に反戦全共斗運動の高揚の中で斗かわれた、テロル・強制収奪等根本的に資本制社会を否定する政治的行為を正当化し、戦略、戦術のレベルを越えた團結をほこる「党建設」を推進することにこの裁判斗争の意義を確認せねばならないでしよう。

以上のように「第四の裁判斗争」として斗う決意を明らかにした我々統一被告団は、ますなによりも政治警察との斗争を総括し、普遍化し、もって多くの革命的労働者、学生、市民諸君の賛同と協力をよびかけるものです。

恒常的武装斗争が権力斗争・党内斗争・党派斗争を同時一体的に推進するものとしてあるならば、レーニン主義的党建設として血肉化されねばなりません。それは、非公然党の建設——政治警察に勝ちぬけるだけの共産主義者の創出として設定されるでしょう。私達は身を持って政治警察との斗争を斗いぬいてきました。

そこには、冷徹な革命党建設の斗いをぬきにして、つまり、党的

は巨大な炎となることだろう。もし「捕虜」でなかつたら、と悔れます。しかし、それ故に、権力共との「生死」の斗争が増々煮つまつているのが、この三畳の独房にもひしひしと感じられます。

誰がが言つたことだが、ただ「歩いている」だけで歩きかたが、左肩を下げて、首をちょっと左に曲げてゐる、というだけで「共産主義者」や「左翼」だと逮捕されていく時代に入つてゐるのでないか、と。真に日本アウシニヴィツツ大学ならぬ日本アウシユ

ヴィツツ国家が、その不気味なカツカツという軍靴の独特的の響きをもつて形成されていっています。この国家は、三権分立とか、民主主義とかいつて、裁判所に「正義と合法」という「仮面」をつけさせて、法務省下の拘置所、刑務所・検察庁・警察と一体となつて、猫がネズミをもて遊ぶように「捕虜」をもてあそび、拷問を何ヶ日も執拗にくり返しているのです。奴らは、戦前からと

戦後の教訓を学んで、戦前以上の効果をあげる手にたけているのです。私の例をあげると、私は七月十四日に逮捕されてから十七日に京都拘置所に移り、二五日に起訴されたが、その後も、検事の手もちである二十日間、ずっと「取り調べ」られた。そして、それが過ぎる日、即ち八月七日に、次は「別件（二・一四斗争凶器準備集合罪）」とかで、逮捕令状なしに検事移監（地裁に、別

母親が面会に行き「泣かせる」等をやつてゐる。

更に、女性、友人関係から「お前の彼女泣いていたぞ、かわい

そうに。彼女の事を考えたらどうだ。彼女、四、五年も待てるのか。君も待てないだろう。」「〇〇君の事を考えろ、君の〇〇の時のポン友、君の為にいろいろ困つてゐるぞ」等々。

権力は彼女に会つて耳もとにささやく、「今まゝだと大変だ。何とか説得するようにななくては。あなたの方から言つて下さい。

事件に關連して、事件を膨大にひろげて、更にフレームアップや友人を尾行したり、恫喝したり、逮捕したりしておどかしていつて、それをネタにしていく。

事件に連絡して、事件を膨大にひろげて、更にフレームアップをして「これら全てお前がやつたのだから、第二の松川事件だ。もう、一生監獄から出られんぞ！」と脅迫。

寝屋川斗争のあと、堺・登美丘局に於て爆発事件が仕組まれ、それを口実に逮捕したように、又獄中の者の仕わざとして連日調べていくネタにする。

組織關係に於て、「誰々は喋べつたよ、この調書に書いてある。

何も、君だけが責任をとることはない、上がいるのだから。君のことだけ喋べればよいのだ、でないと、君はあれやこれやで余分にムシヨに入ることになるよ」と。よく使われる手段である。

件で調べたいから拘置所から警察署に移すようにとの要請)が地裁によつて決定され、八月八日五条署のブタ箱に移されて二四日迄、「取り調べ」られた。令状で逮捕しておきながらも、実は四十二日間、警察の手中におかれていたのです。勿論、この間、完

黙の調書を、二~三枚とったのみです。しかし、このような手で、若い同志達をいじめ抜き、自白させていくのが奴らの常とう手段です。

○どう 喫 とすかし

逮捕した若い同志達に対しても権力は集中して肉親から友人関係に恐怖政治をひき、それを背景にしながら一体になつておどしをかけてきます。これも先に述べたように次から次へ罪状をデッチ上げて、警察署や拘置所のたらい廻しで何ヶ月も「箱」に放りこんで朝から晩まで「取り調べ」という名による拷問を行つてゐるのです。

親、親戚關係から「お母さんが心配して病氣になつてゐるぞ！」

君のことを考えて夜も寝られないらしい。妹さんが、結婚できな

いと言つてゐるよ」など。

そして彼らには巧妙に「今、自白すれば出られます。息子さんは悪いのではなく、組織が悪いのです」と母親の耳もとにささやき、救対の弁護士を変えさせ、救対の面会の前には必ず朝一番に

彼らの言う、下からくずしていくという手だ。一点突破全面展開とか!

社会關係に於て、「君は、今度の事件や何かやで四、五年はムショ入りだ。そして、前科者になるのだ。社会は、もう君を受け入れてはくれないと。その時まで組織があるのか。組織もつぶれ、社会も受け入れてくれないと。君は廢人だ、かわいそうに

」等々。

権力共は現実に、逮捕・起訴・裁判・判決・前科というシステムを作り出し、犬が鎖をとれた時のように、もとに戻らせるシステムを作つておいて、それを恫喝の手段にしているのだ。

「シャバに出ていいだろ。今だったら前科にならずにすむ。最後の機会だ、シャバに出てかつたら、活動をやめてしまえ！」地獄の一丁目を投げこんでおいて、その陰の「シャバ」はもつと良いぞ、こちらに来い々々とは、全くふざけた話だ。シャバも地獄の二丁目を余り変わらん。しかし、奴らはこれをエサにしているのだ、奴らの地獄につりあげるために！

以上のように、あの手この手を使って「おどしとすかし」をやつしているのです。この長期拘留と日夜の攻め手に、若い同志たち

は、悔やむる自白していつたのです。

○ 情報(スパイ)活動

先に述べたように、親・恋人・友人関係から、事件、社会関係まで全ゆる手を使って、「おどし」を長期の拘留の中でやり、その手に「敗けた」者に對しては、次に必ず、事件以外の全ての情報、逆オルグ等を強要してくるのです。「調室」という密室で、何ヶ月もカクリして日夜行われるのであります。

「情状酌量によって前科はつかないようにしてやる。君なんかこんなことで青春を刑務所で過ごすのはもったいない。わかつたら、革命なんて夢だ、さめろ！君は暴行やスリなどのハレンチ罪と違つて、組織的な背景の中ではつたのだから、君さえ喋べつたら情状酌量で自由の身になれる」「さあ、運動をやめてしまふと言え、あとのことは面倒みる。こちらから訊きに行つた時、時々情報を提供してくれるだけで良い」等。このようにして、裏切者情報を提供者を「カゴ」から出して別の「カゴ」に入れるのである。以上のように、「おどしとすかし」「情報(スパイ)活動」を経て、私に対し、三人の供述者がそろつたとして逮捕状をとつた。その際、「致命傷」になったのは、昔、ビラ貼りでパクられた時の写真と指紋です。

最近、特に、尾行し張り込みをしていて、ビラ貼りでパクるのが多くなっていますが、これは、デモの時などの写真よりも、確実な資料集めが可能なためなのです。そして、全国指名手配になり、沖縄(七二年には一体になる!)を除く全国の警察署に、五年前の顔写真と指紋、そして「タバコをよく喫うとか、水虫とか、左に首を傾げて歩くとか」細々とした身体の特徴を書き入れて、手配書をばらまいたのです。

○ 二四時間張り込みと無差別的尾行－逮捕

その後の私に關する「張り込み」と「尾行」はすさまじいものでした。刑事の話を半分に聞いても、「京都府警で三〇人がお前のために当つた」ということです。

彼らは私の親の家には二四時間の張り込みを統け、実に近隣、出身高校に至る迄聞き込みをやつています。そして、かつての高校の教師が、権力の手先となつて私の友人に「大森の居所を教える」と言つてきたというのです。更には妹のアパートにも二四時間の張り込みと尾行を行つたのです。そして妹の職場にまで押しかけ、上役に聞き込みをくり返し、彼女が職場にいられないようにし、とうとう職場を退めるという有様でした。又、私の友人たちに対し、本当に友人だというだけで、二四時間張り込みと尾行をされ、さんざん恫喝されているのです。ある友人は、連日の張り込み・尾行で、さへいなことをとりあげてパクられ、三泊四日を留置所で過ごしているのです。これらは、私が「鉄格子」の

獄中からの手紙

我らフエニツクス

京都拘置所在獄

(その1)

中から聞いたものであり、氷山の一角にすぎないであろう。私に関しても「氷山の一角」しかわからない。しかし、わかつたのは、奴らは本部と連絡をとりながら、十数人の刑事が數台の車をこなして「張り込み」と「尾行」を行つてゐるということです。奴らの尾行は徹底しています。不覚なことですが銭湯にまで、尾行に來ているのですから。(尾けているのがわかつたらこちらのものです、が私は黙さずボケていたのです)そして路上で、令状もなしに、有無を言わさずに「大森だ！間違いない、この番号は！」といふのだからおどろいた。今回は弾圧の状況報告に終りましたが、次は、いかに斗うべきかを考へてみたい。

「呐喊」第二号の「最近の弾圧形態(1)－治安警察の徹底したマシン・ツーマンシステム」はよくできています。ぜひ完成させて小さなパンフレットにして、広く、斗う同志に習熟させて下さい。そうぞう、五条署で、差し入れとして「呐喊」を受け取つた時、刑事がさかんに氣にして、「ちよつと見せてくれ」とすぐ手にして、「印刷が悪いなあ」と言いながら、さかんに読んでいたよ、このことは、逆に、「呐喊」の内容がすぐれていることを明らかにしています。がんばつて下さい。

一九七〇年八月二九日

実な資料集めが可能なためなのです。そして、全国指名手配になりました。沖縄(七二年には一体になる!)を除く全国の警察署に、五年前の顔写真と指紋、そして「タバコをよく喫うとか、水虫とか、左に首を傾げて歩くとか」細々とした身体の特徴を書き入れて、手配書をばらまいたのです。

その後の私に關する「張り込み」と「尾行」はすさまじいものでした。刑事の話を半分に聞いても、「京都府警で三〇人がお前のために当つた」ということです。

彼らは私の親の家には二四時間の張り込みを統け、実に近隣、出身高校に至る迄聞き込みをやつています。そして、かつての高校の教師が、権力の手先となつて私の友人に「大森の居所を教える」と言つてきたというのです。更には妹のアパートにも二四時間の張り込みと尾行を行つたのです。そして妹の職場にまで押しかけ、上役に聞き込みをくり返し、彼女が職場にいられないようにし、とうとう職場を退めるという有様でした。又、私の友人たちに対し、本当に友人だというだけで、二四時間張り込みと尾行をされ、さんざん恫喝されているのです。ある友人は、連日の張り込み・尾行で、さへいなことをとりあげてパクられ、三泊四日を留置所で過ごしているのです。これらは、私が「鉄格子」の

一年二年という実刑判決もでているようですね。しかし、その集権制を備えた前衛党の必要性を痛感致しました。又、考えてみると、革命の歴史は戦争の歴史でもあり、虐殺と監獄の歴史でもあるようです。死や監獄を恐れて、革命を云々する資格さえないことも痛感致しております。

一年二年という実刑判決もでているようですね。しかし、そのような判決を恐れ小細工をするような難党派がいるようですが笑止です。代々木の連中でさえも十数年耐えたということを忘れてはならないと思います。長期拘留や実刑判決にも耐えられず、どうして革命家になれたたり、或は前衛党ができるのかと思ひます。

私達のささいな斗いが、何ものをも恐れぬ鉄の意志をもつた党を

作るのに少しでも役立つことを期待しています。

上申書を同封しました。あまり期待できないと思いますが、で

きるだけ努力してみて下さい。塩見（赤軍派）が「ハイジャック」の共同正犯に問われたようですね。相も変わらぬ奴らの組織のデ

タラメさに 易します。

囚われの身の我が同志諸君に次のメッセージをお伝え下さい。

△完黙はダイヤモンドなり、五年後でも十年後でも変わりなく輝

やき続ける。お喋べりは錆びた鉄なり、土中で腐り果てろ△

△我々を結ぶ糸は信頼だけなり、世界プロ独の確信が君を支える△

恒常的武装斗争を貫徹し、蜂起の陣型を構築しよう△

世界革命戦争勝利！

世界党・世界赤軍万才！

昭和四十五年五月十五日（葵祭か△）

（その2）

前略 山田弾薬庫輸送阻止斗争、全電通反レッド・ページ斗争に対する、極めて悪質なデマゴギー宣伝（読売新聞のチッチ上げにはらわたのにえくりかえる思いです。このデッヂ上げについては公判で明らかになるでしょう。しかし、何故かゝる宣伝がなきはるのでどうか。そこには権力によつて、つけ入れられる弱さ

る。取り調べは常にこのような手を用いるのだ。）

世界プロ独への情熱は不死鳥である△

世界党・世界赤軍万才！

クルシマ ジュンイチロー

昭和四五年五月十二日

返信+A.I.Fから獄中のRG革命戦士へ
山田弾薬庫輸送

バルチザン破壊斗争は不滅だ！

添：島 勲

※注1 文中「読売新聞のデマ宣伝」とあるのは同夕刊五月九日付に、△弾薬列車妨害で手配△という見出しで、既に某斗争で逮捕され京都拘置所に移されていた久留島同志が、△弾薬列車△の犯行を「自供した」という記事であり、警察権力から与えられた原稿をそのまま掲載し、同志間に動搖を与え、分断を計らうとしたものである。前頁の手紙にあるように、これらの試みは失敗に終ったと言えよう。我々の組織の弱さ、人間の弱さによって生み出された一人の階級的裏切り者のために、久留島同志達は現在、大阪の警察署で連日取り調べを受け、精神的、肉体的に虐待されているが尚、完黙に徹し、この「自供した」というデマ記事に激しい怒りをぶつけってきたのである。

を僕たちが持っていたからだと言えるでしょう。真に裏切り者が出なければこのような事態になつていなかつたでしょう。

全組織的に、かゝる弱さが克服されているだろうか。かゝる疑惑を一笑に伏しえないが故に、僕たちの中から出た裏切りを僕たちの組織の弱さとして全組織的に明らかにし、僕たちの弱さを克服し、断乎、デマ宣伝を大衆的（反戦ニユースなど）に載せて下さい）に粉碎しなければならないと考えます。単に仲間達が僕を信じるかどうかといった次元の問題ではなくなつてきています。

懸念していたことであり、いつたい打つ手はなかつたのかと、今更ながらにいらだちを覚えます。組織防衛の甘さ（敵の情報網は極めて発達している。警視庁は六月に向けて徹底的な「マン・ツヨ・マンディフェンス方式」の指令を出した。とりわけ赤軍派のハイジャック以来、それは強化されている。お喋べりの非合法組織はナンセンスである。実践の非合法組織の確立を）について事態は極めて悪化しているように思われます。全て、頭初から懸念していたことであります。全て、頭初から

再度、全組織的に点検して下さい。救援対策活動の軽視が組織的にあることは非常に悲しいことです。ブルジョア新聞のデマ宣伝を、囚われの身の全ての同志に早急に知らせて下さい。（これらはデマ宣伝は信頼関係の切りくずしである。かゝる宣伝が行われていることを隠すな。隠していると、更に権力＝警察に利用され

ます。

党は大衆の「軍事への熱望」と、その自然発生性に廃棄することなく武装を強化し、目的意識的な斗いを組織し展開せねばならないのである。

RGの英雄的戦士諸君！ 日帝の侵略、反革命宣言「日米共同声明」の展開、軍事綱・基地・軍隊の再編に對して革命的に決起した、あの山田弾薬輸送破壊斗争は、七〇年代前半の一定の型を提起し、日帝の侵略、反革命の実態を赤裸々に暴露した革命的・歴史的斗争である。現代革命、とりわけ先進国に於る課題が、羽田斗争から昨秋安保決戦の総括から一般的なゼネスト論を越え、そして赤軍派の単純武装蜂起→権力中枢制圧→臨時革命政府樹立をも否定的に問うということで提出されている時、最もリアルに「パルチザン破壊斗争」の革命的意義を提起したといえるだろう。現代過渡期世界の危機の性格とにつまりも日米反革命同盟から米ソ日対中国、或は、東南アジア・インドシナ革命戦争へと発展する可能性をはらんでいる。真しく、我々の任務が侵略・反革命を世界革命戦争へと発展させることにあるなら、日帝に対する軍事的攻撃の戦略も「帝国主義軍隊解体・基地解体・全人民武装」と、確定されるであろう。

RGの革命的戦士諸君！ 四・二八安保・沖縄斗争は、首都十万の結集をもつて斗われた。昨秋斗争の総括から、七〇年代に於心より同志諸君の獄中斗争の勝利的展開を念じつつ、同時に我々も御身体御滋愛されることを祈ります。

RG-AIF万才！

六月斗争勝利！

日米の侵略・反革命を世界革命戦争へ！

世界党一世界赤軍建設、プロレタリア独裁万才！

関西反帝戦線書記局

一九七〇年五月三〇日

君は一人ではない。僕も共産主義者として生きる。

河本さん！

敵の手の内での斗いは、君を孤独にさせ、仲間、同志からあた

くる党一軍一統一戦線の構造を明らかにし、世界革命戦争に勝利し抜く陣型を構築する戦略と展望を、提出することが問われた四・二八斗争であったと考える。

四・二八斗争が、平和デモか、大衆カンパニア斗争か、大衆的武装斗争かと、動搖した諸派に對して、我が同盟は「軍事力学主義者」赤軍派、「人民戦線派内左派」中核派、ML派、「反革命」革マル派との党派斗争を貫徹し、軍事を軸にした反帝統一戦線の再編強化を主張し、七〇年代恒常的武装斗争の全戦線を強化したのである。全国反帝戦線の大衆的登上は必ずや、六月斗争の勝利的展開の過程で明らかにされるだろう。六月斗争は言うに及ばず從来の反帝統一戦線を再編させるだろう。何故なら、「六月決戦」主義者の軍事的質の低さがそうさせるからである。内乱を夢想する中核派を始めとする党派は「柳の下にどじょうはない」

RG-AIFは共産主義者同盟の旗の下、「自國帝国主義政府打倒・帝国主義軍隊解体・基地解体」斗争を断乎貫徹するである

かのようによつてくる時があります。僕は君に頑張れとは言いません。

多くの仲間たちが、孤独な斗いの中で権力に敗北していくた。京都府警の森とかいう刑事がこう言つているそうです、「僕は人間として、ブンドの連中に話しかけた。そうすると、彼らも必らず人間として應えてくれた」と。その結果、山内などは革命を捨て、自分の行為を自己批判し、人生を再出發することにしたのだそうですね。

河本さん。

僕も革命に生きる人間である以上、いすれの日にか敵の手に捕われるでしょう。しかし、僕は人間が自分だけの喜びを捨て、僕と、そして他の何の希望も持ち得ない人々を解放するために斗おうとする、この斗いはいくら消そうとしても、例え、僕や君がついて負けてくち果てていったとしても、あの道徳づらをした國家権力の忠実な犬どもが、いかに我々を弾圧したとしても消し去ることのできない火なのだと信じています。

君にかけられた敵のいう罪とは、全く、根底的な問題ですからね。ブルジョアジーから奪いつくし、殺しつくし、彼らから一切の不当な私財を奪取しつくことは、ブルジョアジー打倒の当り

前の原則ですかね。奴らがブル新を動員し、全く根も葉もない

デマを流して、左翼とはこんなに悪い奴だ！と宣伝しなければならないのもよくわからず。

君の獄中での斗いは組織によく伝っています。決して孤独にならないで、身体に充分気をつけて下さい。虫歯と耳を治療しておけ！と言つておいたのに、かわいそうに苦痛だろうと思います。

治療を看守に要求しなさい。獄中では空腹だらうけれど時間を決めて手足の運動をしなさい、そうでないと、太り過ぎるよ。

仲間たちは着々と態勢をたて直し、決して、君の弾圧を無駄にはしていません。革命は必ず勝利します。

君の方が先に試練を受けてしまたけれど、僕も必ず君に負けないだけの、共産主義者としての生き方をします。例え、牢獄に捕われた時でも。新たなる共産主義者としての生き方が、君にも僕にも始まつたのだと信じています。権力は全く悪質なデマを流し、個人を切りくずそうとしています。君が権力の追求をはねつけた後、奴らは必ずこの手でくるでしょう。

奴らを見下し、彼らには知ることもできない、苦惱しつゝ生き抜き、斗い続ける共産主義者の魂をその大きさを、君の瞳の中に炎し続けて下さい。必らず、僕もそうして生きてきます。それでは、又一

かありえない。党を体現するのは私達自身なのだから。

私達の斗争は、全てのブルジョアジーから、その私有する全てを奪い返す斗いであり、全ての人民をその支配の鎖から解き放ち、私達の豊かな社会を建設する斗いである。そしてそれは、既存の全ての社会組織を暴力によって転覆することとしてしか達成できないことを知つている。従つて、その過程に於て幾人の善良な人たちを殺すかもしれないし、母をさえ殺さねばならないかもしれません。これまでにもカルチエ・ラタン斗争によつてビン・ゲバ斗争によつて多くの人の生活を犠牲にしたことでしょう。しかし、誰がそれについて語つたでしょうか。例え、心中は犠牲にした人民への申し訳なさと涙で一杯だったとしても、黙して語らなかつた筈です。

この七〇年代を支配者どもの最後の十年間とするべき斗争を開しようとする時、そして、終日にわたる熾烈な権力の弾圧について非合法組織を確立しなければならない現在、お喋べり好きな人たち、馬鹿々々しく良心的な人たちは必要としません。必要なのは不滅の党を体現する鉄の意志と情熱だけです。今後も獄中に於て、ささやかな斗いを続けることを報告して終ります。

昭和四十五年七月

一活動家

返信（獄中より）一

革命への情熱を、敵の掌中にあつても

河本邦江

その二四時間をして反帝斗争を斗つてゐる反帝戦線と赤ヘル反戦の皆さんに、獄中よりのさゝやかなアッピールを送ります。

私たちはこの一年余、権力に対する斗争と同時並行して、赤軍派を始めとした幾多の党内、党派斗争を敢然と斗つてきました。

それはとりもなおさず「恒常的武装斗争」内戦「世界革命戦争」の建設を「党一軍一統一戦線」の陣型の構築として推し進める斗争でした。

しかし、我がブンドが唯一前衛党たりえるものであつたとして、も、そこに結集する私達一人々々が如何なる反革命、弾圧にも抗し、耐え得る存在としてなければ、その党組織は砂上の楼閣でした。しかし、我がブンドが唯一前衛党たりえるものであつたとして、も、そこに結集する私達一人々々が如何なる反革命、弾圧にも抗し、耐え得る存在としてなければ、その党組織は砂上の楼閣でした。

若き反帝戦線戦士たちへ「R Gは屈せず！」

山日本哲昭

R Gは屈せず！

恒常的武装斗争を全戦線に貫徹し、内戦・世界革命戦争の時代を獲得せんと斗つてゐる全ての同志諸君／六月武装斗争・党派斗争を断乎として斗い抜き、更なる恒常的武装斗争の地平へ進撃せんとしている赤ヘル反帝戦線の兄弟諸君／獄中より真紅の友情と連帯の挨拶を送ります。

我々の恒常的武装斗争の展開と革命の軍隊（赤軍）建設に恐怖する敵国家権力・治安警察はR G攻撃作戦として集中的弾圧をかけ、民の武装反撃と、電通反レ・パ武装斗争に対する弾圧であり、我々を二度にわたつて逮捕し、今なお拘留するという気違ひじみた弾圧である。しかし、そのような権力の弾圧（中傷、誹謗、恫喝、転向の強要）に屈することなく獄中に於ても恒常的武装斗争の質を堅持し、完全黙秘で斗つてゐることを報告したい。

このような狂氣じみた弾圧は、帝国主義國家権力の国内に於る武装組織の壊滅作戦としての攻撃が赤軍派に對してある程度成り

遂げたことによつて、次に我が同盟と革命の軍隊＝RGにその目標が転換したことと示してゐる。それは、現下の階級斗争の局面が政府打倒斗争－武装斗争の局面に到達しつつあり、全人民が「武装」を軸に再編されつつある現段階で「全人民の武装」→「帝国主義軍隊解体」を主張し、それを実現せんとする我々の斗争－恒常的武装斗争の展開に対し、ブルジョアジーの侵略・反革命→帝国主義軍隊強化（核武装）という七〇年代アジア侵略と反革命戦争に向けた「全人民の武装」の必要性から国内に於る武装組織の壊滅運動という先行的、計画的、集中的攻撃である。

しかし、我々の斗いは帝国主義権力の恒常的弾圧強化に対して七〇年代階級斗争を内戦・世界革命戦争の地平へと領導する「組織された暴力」の更なる飛躍を勝ち取るという、そのような「党の革命」を通じて全国単一党－非合法党の建設を断固として押し進めるだろう。

同志諸君、反帝戦線の兄弟諸君！

我々は資本制社会を暴力的に転覆し共産主義を全世界に組織するものとして、世界革命戦争勝利－世界プロ独（世界社会主義統一共和国）樹立の斗い、七〇年代階級斗争を恒常的武装斗争から内戦を斗い抜く主体の構築－それは現代過渡期世界をブロック階級斗争を单一の世界革命戦争として斗う「世界党－世界赤軍」のプロレタリアート、人民の武装でもつて打倒し、帝国主義の最後の七〇年代としようではないか。そのような七〇年代は革命党の時代であり、その内容が問われる時代である。共産主義を組織する党への「党の革命」を断固として展開し、非合法党を建設し、革命の軍隊－正規軍の組織化を！

同志諸君！

十一月安保決戦に於て敗北したかに見えた革命的左翼の、その後のブルジョアジーの山田弾薬列車輸送とレッド・ページ攻撃に対する武装反撃という戦闘的な斗いに対する敵権力の階級的報復として、現在、我々と我が同盟－赤ヘル活動家に対する集中的な攻撃は、赤軍派という政府主義的武装組織が、当然にも、この権力との攻防に耐えきれず海外に逃亡することによって、権力と武裝対決できるのは我々のみとなつた。権力－我々という形で階級攻防が深まり、恒常化し、非妥協的になつており、それは赤ヘル活動家に対する（デッヂ上げ）逮捕→長期拘留→転向の強要等々であり、権力はそのことを通じて組織の壊滅作戦をもくろんでいるのである。敵権力の弾圧強化に対し、組織を防衛し、武装斗争を發展させるその要是、「完全黙秘」の斗いである。それは、個人に於る自己との斗いであり、ブルジョア個人主義－官僚主義の克服の斗いであると考えます。

※恒常的武装斗争万才！

建設、そして党の組織する軍隊建設を媒介にした共産主義運動の問題を提起してきた現在に於て、それは「プロレタリアートの世界的團結」→「プロレタリアート世界独裁」の問題として提起し得ると考えます。そして又、共産主義社会は一国のわくの中にとどまらず全世界的にしか完結しないということはスターリニストでさえ認めるが、我々は共産主義社会に至る過渡期社会－社会主義社会も世界社会主義として組織されなければならず、その形態を「世界社会主義統一共和国」→「单一世界国家」として提起されなければならないと考えます。そのことによって我々は國際共産主義運動に於ける連邦制（民族主義）に対して、「单一世界国家」の問題を提起することによって民族の障壁を真に突破できる斗いが組織できると見えます。

世界社会主義統一共和国の樹立に向けた我々の斗いは、民族國家の軍隊－帝国主義軍隊を解体する世界革命戦争であり、現実に共産主義「社会」を組織するために階級斗争「世界革命戦争」を斗うことである。

七〇年代を世界革命戦争の時代として全世界の帝国主義列強をこの個人主義の克服－自己の革命の問題－さまざまの形で表われる個人的弱味等々をいかに克服し、自らをプロレタリア階級の一つの個として変革し得るかという党的團結の内容が、獄中斗争社会的意識の変革の過程でもあると思ひます。

「内戦主体の構築」とは、そのような問題をいうのだろうし、「党の革命」を推進し、恒常的武装を担うる主体への徹底的自己己変革の斗いを通して「革命の軍隊」を権力の手から守り得ると考へる。そして又、我々の恒常的武装斗争は、一方で革命主体の社会的意識の変革の過程でもあると思ひます。

同志諸君！

第一期武装斗争と、その組織的弱点を克服し、第二期武装斗争を断固として獲得せんことを！

全ての先進国労働者は、前衛党－正規軍の領導する反帝戦線軍團に結集し、権力の暴虐に屈することなく恒常的武装斗争を斗い抜こう！

※世界プロ独－世界社会主義統一共和国樹立！

※帝国主義の侵略・反革命を世界革命戦争へ！

※プロレタリアートの世界的團結万才！

※帝国主義軍隊解体・全人民武装・赤軍建設！

一九七〇年七月

大阪拘置所

獄中の同志達へ— 獄中においても「生きた党活動」 に参画を！

救対部

共産同弾圧対策委員会及び、救対部は、果敢なる同志諸君の獄中斗争に連帶と友情の挨拶を送ります。

何よりも、不屈に斗う山本同志の完黙斗争は、武装斗争、非合法時代に於る原則であり、又、我が同盟の團結の質を代表せんとするものだからである。

確かに六〇年代のブンドは半合法的戦斗団としてあり、権力関係に於てはずいぶん「甘さ」を内包していたと思います。もちろん、個々の同志の献身性や革命性に於てではなく、「組織の團結」としてその「甘さ」をもつていたのです。

我々は昨秋の安保決戦をもって世界革命戦争を担う党建設に着手し、共産主義を組織する党建設のその内実に軍事を組織する党

党の革命」のなんたるかを総括し、明らかにしたいと考えます。

又、この間の情況・叛旗派との党内斗争、党派斗争の核心をも一定程度明らかにするものです。

同盟九回大会以降「軍事を組織する党」が提起されその中でR.Gが選抜され、焦眉の課題としての「党の非合法化」が具体化されました。大衆武装斗争の一時代を切り開いた戦斗団としてのブンド・社学同を根底から革命しぬき、計画としての戦術、世界革命戦争の真しく勝利の戦略を確定しぬくものとして「秋」が存在しました。しかし、赤軍派が提起しつつも軍事そのものの自然成長性に摔倒し、「党」のなんたるかを欠落させたまま無惨にも權力の手によって解体されていった過程は、我々が一番よく知っているところであり、ブンドの政府性を最も顕在化させた七・六事件は、六〇年後半のブンドの解体を意味していたといえるでしょう。

共産同関西地方委員会の、とりわけ十・八以降の党建設内容の強さと弱さを一挙に露呈した内容は、一つに反戦地区党と、二つは社学同（戦斗団）指導部としての党にあつたと考えます。「党は組織」であるというテーマに依拠し、無政府主義者赤軍派と党内斗争を推し進めた過程は、「秋の方針」を具体化する過程と同じ進行し、赤軍派は大苦難で敗北し、我々は十・二・中電マッセ

を求め、軍建設をメルクマールに党の革命を大胆に推進してきました。

我々は昨秋以降の恒常的武装斗争の展開の中で、数多くの教訓を得てきたと考えます。それは今日「党の革命」或は、「共産主義を組織する党の團結の質」ということが、多くの同志や機関の中で論争され追求されています。

客観主義的に言うならば、大きく二つの傾向をもつて展開されていることがあります。一つは武装斗争、非合法時代に於

て、第二は我が共産主義者同盟が六〇年安保以降、決して確定することができなかつた世界觀、革命論という綱領的次元の論争を軸に、その体系的、論理的追求をテコに、党内斗争として展開されている内容であると考えます。そして、この論争と党内斗争が従来のブンドが連合党としてあり、それは大衆運動の指導部として存在していた地平から飛躍して「プロレタリアートの最高の團結形態である党」の建設の飛躍と成長という観点からとりくま

れているということを我々は確認しています。

以上をふまえて、SY問題即ち、我々が党の革命を軍事を組織することを恒常的武装斗争として提起し、実践する過程から生み出した腐敗、裏切り、反革命分子の発生を対象化し、普遍して「赤軍派とは違つた大衆武装斗争を斗い抜き、現代過渡期世界に於ける革命戦争を持久戦・恒常的武装斗争から内戦・世界革命戦争という路線でまとめあげ、七〇年代の展望を提起しました。

さてこの間、つまり赤軍派との党内斗争・ブンドの解体的危機・共産主義を組織する党の團結の質を確定する綱領・規約については我々も又、赤軍派と同じく欠落させていたのではないでしょか。情況一叛旗派にしても、武装と軍事問題、なんぞく軍団建設に右翼的に反対する部分として登場してきたにすぎません。

党の革命とは権力斗争・党派斗争・党内斗争を同時一体とした遂行の中で勝ち取られるものであるとするならば、「秋」に於る我々は「権力打倒」の一点であり、戦斗を軸にした軍事力学主義的傾向と立場から「党」を形成してきたのではなかったでしょうか。武装MST・武装中央権力斗争か、武装蜂起・中枢制圧・臨時革命政府宣言か、というレベルの、つまり、戦略、戦術階級形論・共産主義論へと発展することができ得ず、不斷に大衆の自然発生的高揚の熔鉢炉に党を解体させ「決意主義」と「官僚主義」

で戦斗組織を展開させたにすぎないというべきでしょう。

ブンド関西地方委に於る赤軍派との党内斗争、党派斗争は、軍事を組織する党の型と軍形成論と革命の型と現代過渡期世界論をめぐる論争として、一方、党は組織であるという一般的なテーゼの接収として進行し、反戦地区党の「労働者党员」の献身性、組織性に依拠する形で「秋」が斗われました。SY問題の根本もこういった党の中から発生したものにすぎないと考えます。献身的活動家、党员として展開したSYを内包すを党の团结の質とそのレベルが、軍事をはらむ党の構造問題として、他方、極めて自然成長的に形成された軍事組織をめぐる行政一非指導の関係としての押し計られ、党の革命の手段としてのRGが象徴化されたところに大きな問題があつたと考えます。あるがままの党に規律と注意的実践を要求する指導部、或は官僚主義的に実践させる指導部から党の革命とは、赤軍派がおちいつたように不斷に反スターリン・無政府主義一解党主義へと転落せざるをえず、又、素朴実践主義的傾向と無批判的な党への献身性が物神崇拜を生み、外在的に党を、組織を位置づけることになるのである。

我々は「党の革命」を「一人が万人のために、万人が一人のため」に、「戦旗」、「呐喊」書簡を媒介にして獄外に伝え、AI F、反戦、或は党の活動の具体的な活動に操り入れていくということです。

獄中とは、革命勢力や党とはしゃべられた非政治的な真空地帯で勝利する以外に自由になる手はないとしても、それに至らない今日的な段階では、獄中一獄外の完全なる結合を、書簡や研究論文、学習をもつて表示し、なかんずく党の現在的な問題意識や将来にわたる戦略、戦術の展望を獄中での作業として、研究し、学習し、「戦旗」、「呐喊」書簡を媒介にして獄外に伝え、AI F、反戦、或は党の活動の具体的な活動に操り入れていくということです。

この間の党とRGの関係を総括するならば、時に、この原則の方針が重視されなければなりません。なぜなら、直接、党の組織や党が形成構築する政治勢力に立脚しないところでの党活動、なかんずく党の革命一党内斗争一権力斗争へのかかわりを完全に保障し、且つ生きた党活動一党生活を形成せんがためだからです。現場主義、大衆運動主義を根底から止揚することが要求されています。そのことは、眞に革命論の構築一非公然党の建設として論争されている論理的内容を党組織一党規約一党纏領の次元まで実践的に接近させることを意味しています。

かし、プロレタリアートの最高の團結形態と質を内包する、党に於る党内斗争の軸が設定されず、再び官僚主義と無政府主義を生み出すことになるのです。

ブランド関西地方委に於ては、党内斗争を組織する指導部が不在であつたという客觀的条件が不斷に現場主義に解体される中で腐敗分子を生み出し、大衆運動主義を止揚することはできえなかつたと考えます。我々が軍事を組織することに積極的でありながらも、革命論一共産主義論を媒介にし、且つ立脚した党内斗争を組織することに無自覚であつたことについて自己批判しない限り、SY問題に代表される組織の腐敗と堕落を革命することはできまいと考えます。

るに大きな問題があつたと考えます。あるがままの党に規律と決意的実践を要求する指導部、或は官僚主義的に実践させる指導部自身の革命を待たずして党の革命はある筈がなく、こういった観点からの党の革命とは、赤軍派がおちいつたように不斷に反スターリン主義一解党主義へと転落せざるをえず、又、素朴実践主義的傾向と無批判的な党への献身性が物神崇拜を生み、外在的に党を、組織を位置づけることになるのである。

さて、山本君、不屈の完黙斗争、そして共産主義革命と共産同
へのゆるぎない情熱と固い意志とに、我々は誇りをもつて評価す
るものであり、ブンド全同盟員の規範として獲得していくたいと
考えます。ブンドの党の革命を先に述べた内容で展開している現
在、尚も山本同志にこの党の革命、党建設の事業に参画すること
を主張します。即ち、幻想のブンドへの忠誠や個人の頑張りズム
に不斷に解体される傾向をもつ獄中斗争と、獄中の生活に対決
すべきその方針を簡単に述べておきます。

以上の内容を提起し、山本同志の獄中斗争の任務については別

更なる強固たる斗いを一 猛暑の折、ご健康に注意下さるよう

添島徹

追伸 SY問題についての見解と、歴史的争いの実情を改

対部 まで、

廣雅

洪武
田
貞

前略、
1. 3 全兵庫政治集会に結集された労働者、学生、高校生

敵権力の△共産同RG壊滅作線▽の集中的な弾圧の中でパクラ

出で、どう。今更どう筋合ひがうまい。最後の幾

シ、ハ出たか、たら活動をやめてしまふ」という風に

の革命の前進と、革命の軍隊建設に向けた我々の確信を揺がす事

すら成功していません。

シャバにいる全ての反戦・全共斗の仲間達。我々は獄中で権力に對して完黙斗争の貫徹をしながら理論武装にマイ進しています。

獄中で一切の社会的活動と切斷されている我々の励みは、唯一、

獄舎の外の皆さんとの不屈の斗いのみです。皆さんの斗いが、日本帝国主義を大きく搖がし世界革命戦争の道を雄々しく前進する時、フランス革命に於けるバステイユ牢獄解放に匹敵する、いやそれ以上の刑務所・拘置所からの政治犯の奪還と、革命戦争への参入を克ちることも可能となりましょう。

全ての兄弟、仲間達。シコシコ、保釈金を集める事にエネルギーを浪費しないで「今度会う時は戦場だ！」合言葉の下に、我々、全ての戦士達を実力で解放して下さい。世界革命戦争の炎が全世界を赤く染める時、再会する事期待して手紙を終わります。がんばって下さい。

一九七〇年十月十五日

浜田 則男

獄中斗争とは何が

一五ヶ月間の獄中斗争の総括より

太森

進

獄中斗争は、精神的肉体的な政治的試練の一環として我々の前に提起される。権力（公安警察）の予防反革命弾圧の先行する、現在にあって、我々は絶えず、権力の手に落ちる事を覚悟せねばならない。そして我々は獄中に於ける困難と消耗を止揚することをもつてのみ絶望的な、資本主義社会の自由に傾斜し転向していった、かつての同志諸君に對して共産主義とは、なにかを解答できるであろう。ここに獄中斗争における総括の一環として、体系をもつてのみ絶望的な、資本主義社会の自由に傾斜し転向していく。

現在、國家公安警察は反革命としての意志統一をほぼ、トップレベルで完了し我々革命党と革命の軍隊を壊滅せんとしている。その先行的弾圧は、我々に対する大量検挙と、今秋1.2斗争にもみられる様に党派軍團に対する、完全デモ規制並びに地区党に對する、二四時間にわたる全面監視をもつて押し進められている。権力は更に獄中ににおいて我党員を、物理的に分離し、その個別的思想的解体をもつて、党组织總体と内部における再生産構造を紛糾せんとしている。

彼等は、彼等自身の立脚基盤とする、ブルジョア政府と、その

小市民思想で武装し、軽薄かつ滑稽な労働者国家批判を櫛とし、我々の立脚基盤である綱領、戦略、資本主義批判に對して攻撃を進めている。我々は、この思想斗争に對して、個々に残存するブルジョアジーの発想（思想）を払拭し、ブルジョアジーとの思想斗争と、

して鮮明化することをもつてのみ、我々は獄中斗争をより、革命的実践として止揚できる。いうまでもなく我々の、立脚基盤は党である。我々の獄中斗争は共産主義運動の一環であり、党建設の斗争である。その斗争は公安警察「資本家の党」との思想的組織斗争と規定すべきである。転向していく多くの同志達は、この点を明確にすることなしに、権力との關係を個人と権力との対決としてとらえたところに彼等の破綻がはじまつたと考えられる。

我々は、現実に直面する党活動において様々な問題を解決してきただ。しかし、まだ体系的な獄中生活者に対する、政治的・指導方針が立っていない今、小生はここに教説活動に対する一定の批判と総括としてこの仮説的文章を提出した。一部には、方法論的総括として批判される方もおられると思うが、大胆に提起する。

獄中における様々の困難との止揚に向けての

（仮説）

A、獄中に於る物質的窮迫と肉体的消耗

B、家族問題

C、外界との切斷による政治指導問題

D、自己の政治主張「自己の行為」が正しいかどうか

Aについてには多くの比重をしめない。我同盟の同志諸君は一般的に生活水準並か、或はそれ以下の者が大部分である。獄舎につながれる限り、食住医は、ブルジョアの人権の中で最低保証される。我々プロレタリア戦士にとって獄中における物質的窮迫は大きな意味はもない。物質的窮迫は我々にとって、經濟的弾圧をかけられる中できたえられ、プロレタリアートの持つ、独創性の中で解決されていくものである。肉体的消耗は倦怠感を促せしめ、さらには肉体的消耗に拍車をかける事になる。精神的、性格的に弱い者は、これが加速度的に結びつく事があるときく。獄中における独房における独居生活は人間を不思議に感傷的な精神状態へ導く。である。しかし最低いえる事は、我々革命戦士にとって獄中獄外を問わず、肉体をきたえ、健康を管理することは一つの階級的任務である。もし我々の一人が健康を害して倒れても、我々にとつて同情やあわれみは必要である。権力はどうてその結果は、彼等の望むところであり、しいては間接的な意味での反革命である。

（1）完全に關係を断つてきた場合

（2）不子數点を家族と互いに確認し、一定の理解に達した例

（3）完全離我同盟オルグをじきつた例

治安警察との斗争に勝利せよ

「ラン・リー・ム」システムによる治安警察の徹底した張り込み。尾行・とつ喝・スペイ活動

さて、今日、日本帝国主義は今だ侵略と反革命を統一することができず、民族主義、反ヘンショナリズムでもって不斷に起りつゝある暴力斗争を圧殺することができず、即ち、からのファシズム運動を「暴力反対・民主主義擁護」としてしか呼び起こすことしかできないのである。その矛盾を、上からの権力再編によつて、裝備強化を通じた機動隊（万能）治による圧殺を計つてゐる。

島添　　街頭に於る攻防のみを主軸にしたもの、実はその「暴力の貫徹」は二十四時間、恒常的な権力との対峙状況を露現したのである。羽田斗争に於て斗う全学連の同志山崎君が撲殺された事態に対して、権力、マスコミ共々、「全学連、反戦の暴力斗争の否定、同士うちのフレームアップ」を宣伝し続けたのである。市民主義者は機動隊の横暴と、全学連・反戦の暴力を批判して憂い、権力は事後逮捕検挙者の長期拘留、報道管制態勢をとり、機動隊、治安警察の増強を計ったのであった。一方、司法権の独自性、中立性をヴェールとする裁判官はブルジョア法の番人らしく、法の拡大適用、道公法や公安条例から凶器準備集合罪をもつて裁くのである。

十・八羽田三争が政治的・階級的には「臣隸主義」と組織された暴力」三争の後ろを駆け取ったことは、歴史的に確認されている。しかし、「権力の暴力、治安攻撃」の質的・形態的換についての対応はほぼ明らかにされていない。現象的には、敵権力がデモ隊を並進規制することによって戦斗的デモを圧殺してきたことに対する限界を、「ゲバ棒とヘルメット」で突破したことなど他ならなかつた。

の問題は獄中と党をつなぐ、政治指導の問題としてとらえられる。外界との切斷における情報の不足は、獄中生活者にとって不安なものである。とくに分派斗争・党派斗争の時期には、決定的なものとなる。優秀な革命戦士を獄中において政治的に消耗させるのは権力の目的である。我々はこの攻撃に対して、獄中の同志達に對して権力關係に許されるかぎり党内論争・党派間論争・党建設論争を組織すべきである。これは獄中における文書作成をもつて再度獄外にて組織することが、可能となる。しかし、活動をはじめてまもない活動家にとって、革命論は戦術・戦略レベルで意志統一されている傾向がいまだ色濃い。彼等に對しては指導部の徹底的な政治教育と政治指導が必要となるだろう。獄中における政治的進歩を指導部は觀察し、計画的に（個人単位）資料、教科書、総括文等を投入する必要がある。但し、必要以上の計画性は犯罪的な結果を生む可能性がある。

我々革命家にとって、獄中において最悪の場合には、何の援助もなく、すべての通信もとだえる事を覚悟しなければならない。これが、我々の階級的任務であり、我々の求める党員の質である。我々は、獄中においては、黙秘、要求斗争を通じて、資本家共に對して思想的勝利（党建設の斗争）を宣言しなければならない。革命的獄中斗争を勝利するぞ！

懲罰及び、その家族に対する攻撃としてたてている。我々がいかに党内論争・党派間論争を獄中に組織しようともこの点がおさえられない限り、それは全く無意味である。転向していくた諸君の多くは権力にオルグされることをもって転向を決意したものと推測される。獄中における権力との対決は、彼等の思想を打ちやぶるところの政治的内実をもたない限り、耐えることは、不可能である。党が具体的には個人の思想に現われるのであり、個人の思想・革命性一般のみに対する攻撃ではなく、我々の綱領・戦略に対する積極的攻撃であると理解すべきである。我々の立脚基盤は資本主義批判を通じて関連し、綱領・戦略・党を貫ぬく革命的実践!! 共産主義として止揚される。我々にとって公安警察との対応は自からの政治性と思想性の発展を確認するのにまたとない試練となるだろう。

らはより一層完全に緻密、且つ大胆に、何よりも下から自民党から日本共産党までを動員した「右翼自警団」が組織されるに至っている。我々は、この実態を「一日軍政」と呼んでいる。この一日軍政を支えているものは、上からの強権的治安態勢と、一方、自衛隊の公開→治安訓練による人民戦線派への恫喝だけである。

だが今日、一日軍政は恒常的治安攻撃へと質的に転換されてきている。その実例を次にあげていく。

◎二四時間の張り込みと無差別的尾行○

「張り込み」「尾行」とは、従来逮捕状の出ている者か、大斗争の前後に組織の指導者の動向をチェックするために、二～三日程度その身辺を見張るだけであった。

だが、昨秋安保決戦より開始された大衆的武装斗争、バルチザン破壊戦争は、権力をして二四時間、中心的活動家のアシト、政治党派の事務所、一方、企業では労務官僚を動員しての下部活動程度その身辺を見張るだけであった。

これらに対する我々の対応策として、我々は既に多くの者については、顔写真や住所は権力の掌中にあると判断せざるをえない。張り込みと尾行に対する我々の原則は、

- (1) 組織の横の関係を権力に知らせないこと
- (2) 重要な会議は公のアシトを使用しないこと

(3) 権力は張り込みをする場合、アシトの近隣の家、アパートの管理人等に必らず聞き込みをするので日常的に警戒しておこうこと

(4) 尾行については終始、気を配ること。尾行されていることに気がつけば必らずマク。マケない場合は公然とした事務所や建物に入つて時間をかせぐこと。仲間との待ち合わせはすみやかに処理しておくこと

(5) 張り込み、尾行時の刑事の顔や身体の特長を覚えておくこと。車であれば必らずナンバーをひかえておく。

○どう喝○

権力の常套手段である恫喝は、今日的には次のようである。特にA I Fの活動家、反戦活動家に対して、一人で街を歩いている時、又は自宅に電話があれば家族に、現在どういう活動をしているとか、今度のデモでパクル、〇〇という人間を知っているか、とかを二人ないし数人の刑事によって恫喝に近い詰問をする。又、気をつけなければならないのは、以前に警察や刑事に何かのきっかけで世話をなつたり、知り合いになつたりしている者は「聞き込み」の重要な対象となるので、そういう場合は必らず断乎とした態度で拒否することである。

○スパイ活動○

スパイ活動は、階級斗争の煮つまりが「権力斗争＝武装斗争」へと発展し、非公然活動が重要な位置を占める時代には必らず激しくなる。

その型としては、
(1) 組織の中枢へ、長期の活動を通して入りこむ
(2) 売収、つまり金や物で情報を買う。

(3) 最も激しいのが、我々個人の弱みを握ってスパイを強要させる。これは通常、女性関係、家族関係、現金の貸借、別件の事件（窃盗、軽犯罪等）など、個人的に近づき縋りで首をしめる方法である。

又、売収については、例え「一食」でも権力の世話になつたり、或はそんなことぐらい僕は大丈夫だとタカをくくっていると必らずそこをねらわれる。一切の手にのらないことである。

この様な政治警察の徹底したスパイ活動に対する、革命的警戒心や精神主義を観念的に意志統一するだけでなく、一切の行動を数人ないし最低三名で確認し合い必ず総括を行うこと、権力関係でスパイ行為があつたと判断した時も必ず最低三名が組織の責任者と点検を行うこと。個人的に弱いところを持っていたら必ずすみやかに現実的に処理していくことである。

以上、実例とその対応の原則を簡単に述べた。もう少し、リア

(1) 尾行から直接職務質問に変わり、持ち物の強制点検、パクリ (2) 実家の両親、兄弟等の家族を通じての恫喝 (3) 別件や仮釈放の者に対する監視と恫喝 (4) 戦線離脱者（消耗した活動家）への恫喝

総じて、これらに対する我々の対応は未だ、

(5) 非公然と非合法のはき違い

(6) 非公然にしてしまうか又は、警戒心から活動の萎縮化

(7) 従来の合法バカラからの転換の遅れ

記録手段の無選択、不注意な取り扱い、盗聴電話器の無神経的使用、メモ、ノート、日記、原稿類などの個人保管、手帳、アドレス、電話番号帳などのぞんざいな扱い、バッグなどの相互無点検

④ 権力関係を個人や決意のみにまかせる市民主義的考え方

組織相互の点検不足、情報の分散化

などの傾向を持つていると言わなければならない。一刻も早く非合法体制に耐えうる、いや耐えなければならない我々の「原則」を鉄の意志でもつて確立しようではないか。

共産同弾庄対策委アツピール

などの意向を持てないと言わなければならぬ。一刻も早く非合法体制に耐えうる、いや耐えなければならぬ我々の「原則」を鐵の意志でもつて確立しようではないか。

みによつて斗われる歴史的な斗いです。既に革命と反革命の攻防の環が七二年沖縄派兵・帝国主義軍隊の確立として設定され、我々も蜂起[[臨革政府樹立の主体的準備としての反帝統一戦線の蜂起統一戦線への解体・再編を勝ちとる総路線（帝軍解体・正規軍建設・全人民武装）の提起と陣型構築の第一步であると確信しています。しかしそれは我が同盟が苦痛の党内党派斗争をもつて推進した党的革命の血の成果の上にあることを踏えなくして勝利の大道は切りひらくことが出来ないでしよう。我々は今後も世界党建設—世界赤軍建設の内実を世界プロ独樹立、世界革命戦争勝利として断乎たる「党的革命」を推進するでしよう。

さて権力斗争・党派斗争・党内斗争を同時一体的に推進し、党

権力の「新四派」(RG)。
赤軍派・京浜安保共斗・ア
ナキスト) デツチ上ゲ=フ
レームアツプを粉碎し、非
公然堂建設を更に進めよ

した同志諸君！一〇・
二一首都結集、防衛庁
攻撃斗争は七〇年代日
本階級斗争を唯一、恒
常的武装斗争一峰起＝
臨革＝内戦・世界革命

の革命を「共産主義を組織し軍事をはらむ党建設、なからんずく革命の正規軍RG建設として大胆に非公然党を建設する我が同盟に對して国家権力は本格的な反革命弾圧を開始しはじめた。共産同弾圧対策委員会はその陰謀と事実を暴露し、断固たる反撃を同盟をあげて組織し、さらに政治警察にうちかつ不抜の党建設を貫徹し、もって恒常的武装斗争の推進強化で粉碎しぬくことを全ての同志の前に明きらかにしておきたいと思います。

一、新四派デツチ上ゲ策動と反革命弾圧の本質
九月下旬、警視庁公安は次のような見解を記者会見の

浜反戦団は極左破壊団体であるし、徹底して取り締るというも
です。さて、この発表の権力の意図は、①党建設、なんばくすく
起、臨時革命政府を樹立せんとし、党の一切の目的意識性をそ
陣型構築に設定した我が同盟と現代無政府主義者赤軍派・狂信
毛沢東主義者京浜反戦団・アナキストを並列化し、蜂起の党をさ
ざす我が同盟を無政府主義者として宣伝し、野合や統一の動きを
さも現実にあるかのようなデマゴギーをふりまくことにあり、②
としては①をもつて昨秋から始まった赤軍派・我が同盟 R.G. いわ
ゆる軍事組織廃滅作戦を徹底化するといふことです。

しかし同志諸君、極左団体指定とか、狂氣の弾圧とかは我が廿二年産同にとつては名譽なことではないだろうか。「新四派」のことの本質はそのような一般的なものではないことは、我々の党の吉

争の貫徹をはらむことによつてしかプロレタリア革命は遂行出来えないといふ原則を否定する策動以外のなにものでもありません。即ち、今日八派統一戦線・反帝統一戦線の革命的再編は「蜂起統一戦線」として勝ちとられねばなりません。

合や、大衆の自然発生的軍事の熱望の上に「蜂起」があるのではないのです。

果は、党の任務を軍建設に一面化し、プロ独、世界社会主義、共産主義の組織化を欠落させ、大衆の自然発生性の熔鉢炉の中に消えた赤軍派を解体し、他方、現代帝国主義の生み出す再編の矛盾に抗して発生するプロレタリアートの個別斗争・地域斗争のその大衆運動にぶらきがりながら、ソビエト運動論なる論理を与える、プロレタリア革命を、プロレタリア独裁を党一軍の下に貫徹する眞のプロレタリアの任務を放棄した情況派を粉碎し、プロレタリア革命の為に、党を純化させてきたことにあると考えます。今後も我が同盟は現代無政府主義・現代経済主義・スターリン主義・一国主義と徹底して斗うことを宣言しておきます。そして、世界党建

同志諸君！プロレタリア革命にとつて、必須の党の革命を現下の階級斗争の否定的反映としてとらえるのでなく、権力の策動、混乱デマゴギーにのることなく、我が同盟を蜂起の党－共産主義を組織する党へ純化し、飛躍させようではありませんか。

二、恒常的武装斗争の新地平を切り、非公然黨の礎の
　　固めた五Gを防衛し、獄中の同志を早期奪還しよう。
周知のように、権力は反革命弾圧のホコ先を我が同盟に集中し

てかけてきていることは（Y—R—G）への弾圧をみればよいでしょう。

よう。そしてその攻撃の質は、赤裸々であり陰謀的であります。

ブル新・週刊紙を動員しての挑発的キャンペーインはそのまま「

蜂起」の目的意識と断固とした非公然党建設のうちにかえして

やろうではありませんか。

共産主義者同盟の真赤な魂を、その戦斗性と不屈の精神で斗いぬいてる革命の正規軍は権力の執ような追求にもかかわらず、また獄中においては転向強要に屈せず、現在もなお、健在であることを報告しておきます。

同志諸君！山田弾薬庫輸送阻止、電通反レッパを斗いぬいた同志諸君に対する弾圧は熾烈を極めました。しかし、この一年間の政治警察との斗いは我々をして党の革命を深化させ、一〇名に及ぶ戦士の逮捕、長期拘留の代償としては、我々は有利な地平を獲得しつつあることを確認しています。それはなによりも、軍事的政治的質は党の綱領と政治路線と非公然党建設の斗い（党内党派斗争）のうちに確定されるという冷厳な階級斗争のきびしさの中で確認したからです。それは決定的には我々の恒常的武装斗争の路線をRGの不屈の武装斗争を頂点とした軍事力学主義的党建設から、再度蜂起臨革にむけた「蜂起の党建設」「党・軍・統一戦線の陣型構築」へと高めあげられた内実として確認できるでしょ

う。

同志諸君！RGを防衛し、奪還することは徹底して一切を蜂起・臨革にむけた非公然党建設として、さらに推し進めることであ

さて今日四名の不屈の同志が獄中にあり、早期奪還を勝ちとら

ねばなりません。また、東大安田トリデで斗いぬいた二名の同志に実刑判決がかけられ、控訴保釈をかちとらねばなりません。弾

対・救対は今年中に奪還することをめざして斗っています。全

ての同志に広くカンパを訴えたいと思います。

三、政治警察との斗いに勝利し、不抜の非公然党を建設せよ！—一年間の教訓とレーニン主義的党形成—

我が同盟はこの一年間、政治警察との斗いにおいて、苦い敗北を幾多か経験してきました。この裏切りと腐敗と堕落を対象化、総括しもつて我が同盟の团结の質と党の革命の原則的地平を明きらかにしたいと思います。

一、戦斗團主義との斗い！我が同盟は一〇・八以来その先端に立ち、かつ武装の突出力はSSLによって担われ、不可能とされていた④の壁をうちくそいたのです。しかし権力の壁にはばまれるや、再度権力を突破するためには安易な軍事力学主義的技術や官僚主義的政治技術で組織の团结を維持しようとする傾向が生れ、一

拳的に無政府主義を呼び起すことになったのです。階級斗争の局面が反政府斗争から政府打倒斗争へ転換したことを認識しても、権力打倒の戦略・戦術しか、意志統一していない組織は全く無力であることを我々は戦斗團主義として純化していった赤軍派との見内党派斗争の中で教訓化しました。革命の手段としての党や、

階級形成の媒介としての党は、不斷に官僚主義・大衆運動主義を生み、素朴実践主義的傾向を容認しもって、組織物神崇拜のうちに権力の拘束に屈することになるのではないのでしょうか。生一部の裏切り者は必ず、プロレタリア革命の勝利的貢献のうちに粉砕されるとしても、今日的な党の革命の地平を一步もゆずることはできないと考えます。恒常的武装斗争の軍事的重さに（一〇年の実刑判決や生死を伴う権力・党内・党派斗争）敗北じたのではなく、党建設路線のうちに戦斗團主義や忠誠主義の軍事技術主義を内包していたと言わねばなりません。我々はまず組織日和主義を押し、プロレタリア革命のためには、断固として党内党派斗争を推進するでしょう。セーニン主義的党形成はそこにあるのであり、空文句や決意としての政治警察との対決があるのでないのです。

同志諸君！我が同盟は「蜂起の党建設」の巨歩を今、歩みはじめました。プロレタリアの遠大な事業蜂起を準備し、組織する党

人工衛星

別荘生活

△京拘から兵庫署へ

九月十日から十月十三日の三十四日間の兵庫署のブタ箱生活は人工衛星だった／どうかその人工衛星の「声」を聞いて下され。人（権力者）によって工（逮捕）された衛星（留置人）の声を聞いて下され！

おーい／八房 今日も人工衛星か、ガンバレや／と下からの声：：今日も朝早くからオレは「人工衛星」や。人工衛星：：オレが高校の時だったか、ソ連がはじめて打ち上げたあの人工衛星。地球を軸にまわるあの人工衛星。：：四・五隻ぐらいの「房」内をカベにそって歩きまわる。運動不足を補い、ストレス解消のために歩きまわる。一周に一五・六歩かかる。はじめは仲々軌道に乗らぬが、数を五〇〇ぐらい数える頃になると 身体も自然に房の中心を軸にまわりはじめる。まさしく、誰が名付けたか／人工衛星や。三〇分から一時間が大体一回のタイムや。これを一日四回から五回行なうのである。本当に誰言うともなく「人工衛星」と名付けられた。／「人工衛星」という科学の極と権力の極の結合を皮肉ったものか！

オレの生活は 朝起きての人工衛星、食後の人工衛星、寝る前の人工衛星。人工衛星にはじまり 人工衛星に終わる生活だった。

や、身体に気をつけて」の声におくられて階段を降りていった。下に降りていくと「型どおり」検事によつて兵庫署に移管の旨を聞く。…応接室に三人のデカが待っていた。もう再々度になると全くおちついたものだ／自分でおどろく／手錠をかけられ車に乗つて京拘を出た。

久しぶりに見る街は 秋のにおいがしていた。高速道路を百キロで飛ばすこの車は、各府県本部警備に置いているという。いわゆるエライさんの警護用の車とか。中には無線もつき、乗りここのも充分や。ひさしぶりの京都一神戸の間の状況も「万博」祭のため変わっているのにおどろいた／車中「祭も終ったし、いよいよ権力さんも本番やね！」と言つたら笑つてしまがつた。早いもので四〇分、四五分で神戸に着いた。兵庫県警に寄つた。その時 若いデカの奴が「あ／バクダンや」「そのタバコあぶない／」とあさけていた／「何をこわがつてのや」と言つてやつたら笑つてやがつた。そして兵庫署に行つた！

兵庫署留置所一ブタ箱へ

一時三〇分頃兵庫署に着く。兵庫署は建物自体は二年前に建つたもので新しく、兵庫県警のうち長田に次ぐ大きな署で署長は警視正とか。形どおりの逮捕状を見せられて やれ「一時三五分に執行や」「おとなしく抵抗なく逮捕」とか何やかや言いつゝ書類

中にもわずかにしてくる頃になり、秋のにおいが 房の中にもわざかにしてくる頃になり、今日も 元氣いっぱい「三〇分の運動」走りまわって、汗を出して房に引きあげる時看守が

細い紙きれを持ってやつて来るのに階段で出くわす。「大森君、又移管や」「どこでつか／」「兵庫署や」「あ／そうですか／」

「令状を持って来ているのか」「何人来ている」と聞いたら「三人が来ている。令状は分らない」とのことであった。「私たちにかく移管指揮者に従つて来ているのですから」とさ。そんな会話をかわしながら 房に帰る。「運動」で流れる汗をタオルでふきながら

「急いでくれ」という看守に対し「あわてなさんな。メシはどうの間 身のまわりの整理を行なう。そうしていると、エライさんがやって来て「大森君／ゆつくりメシを食つてゆきな。」といふことで カンズメを開けてゆつくり食事をした。そうして房を十二時頃出た。房を出ると雑役（懲役の人）の人たちの「ガンバレ

を作つていた。そして例の如く弁録をとつた。「君の弁明を聞くのやから君のための書類や 何でも弁明していい。」とぬかしたが「分つてやる 一切黙秘や」とニヤと笑う。一応の手続きが終わつたところで「さて調書を取るかな。どうせ黙秘やな」といって「今日はもう入つてもらおうか」ということで留置所一ブタ箱に入ることになつた。三人のデカのうち年令が三四・五才のずんぐりした播州人特有の顔をした男が担当とか／三宅利秋と名のつた。巡査部長で昭和三十一年頃から「警察デモ」ということで十四年間警察官を勤めているとか。四・五年前から警備担当で特に二年前から学生関係担当とか。姫路に住んで二時間かかって通勤している。二人の子供がいるとか。彼とペアを組んでいるのか藤田抽也という巡査で年令は二九・三〇才九年間巡査をやつてゐるとか。もう一人のデカに名前を聞くと名前は言わない。ひつてく聞くと「殺されではかなわんからなあ」とさ。どうも今日はデモが神戸であるらしい。

留置所一ブタ箱に入る前に「オレは被告である。」と主張し「差し入れ弁当を入れること」「メガネと本を入れること」「運動を十分にやらせること」を要求した。そうして結局「差入れ弁当」と「メガネと本」が入つたが独房ということになった。そうして留置所に入った。

留置所・警視庁と同じ作り。一階様式で一階に七房、二階に六房の計十三房。房は扇形の四・五畳くらいの大きさ。一応全体の建物の中で二・三階に当るが日光は房内は入らぬ。

房に入るとなす、担当（留園場の警官）を呼んで、眼鏡と本と運動について念をおした。その際、皆に聞える様に大きな声でやり合った。「眼鏡をかけなかつたら、その人は普通ハツキリ見え

第一房は特殊房として、麻薬患者・精神病者・泥酔者を入れる房——全国でも珍らしいとか——中は全てゴム張りで窓はなく、テレビで監視する仕組みになっている。ところがこの第一房は、

「他目的」にも乱用されている。全國にも珍らしい。人よんで、これを「懲罰房」という。誰一人として特房などとは言わない。

文句を担当官に言つたりすると「所内の秩序を乱す」という事で、アルにされといふのと同じやないか！」「別に……」「運動を充第一房に送り込むのである。長いので二週間から一月にわたつて十分にさせる、食後に煙草を喫わせる」「その施設がないので。屋放りこまれるのである。実際、俺のいた間にも当初二回ほどあった。抗議したのちはなかつたが……。第二房・保証房・第三房・婦人房・第四房・少年房・第五房・七房・成年房・そして八房と言つたら、「私は一担当官であり、課長に言つて下さい」の一点は普通オカマ専用の房。ところが俺の場合、独房という事で、こゝと棲の定、所内で騒ぎ始めた。「何で八房だけ、眼鏡と本が入るのオカマ専用の二階の奥の八房に入れられた。房の中は口紅の赤のや」とハチをつづいた様な聲になつた。担当官は、弁明これい色やら何かの色がついており、又、何やら変な匂い一男が女に努める。「特別に許可もらつてゐるんや、弁護士からの本や」等なるのだから、そして男として何日か房に入るのだから、その特權。すると「八房よ／＼お前だけがいい目をするな！」と言つてしまふ。俺は「何も俺だけがいい目をしているのじやない。こんなのは当然や。悪いのは、警察やぞ。同じブタ箱の中で喧嘩したり、反た

目してもしようがねえよ……。何も特別じゃない。唯被告という事だけや。被告やつたら、当然、法的にも要求できるんや。俺の場合、本部預りだが、俺も言うから、自分等も言えや」と言った。各被疑者、被告に連日弁明つとめるようになつた。留置所の担当官は、「署長も首をかしげていた」今まで数多く入つたが、眼鏡は禁止品目だし、例外中の例外なので、本まで入るのだから大森は大した奴だ／革命だ／」とぬかしおつた。

△ブタ箱とその生活

ブタ箱も大阪、東京警視庁、京都、神戸と四。五度目になると、色々工夫し、己れにあつた方法を考える。俺は、警視庁で百余日間、留置されている人から聞いた。「元氣を出せ／精神力やせ／ここに入つたら、ここを自分の家と思って氣染にやることや。これが第一。第二に日本の建てる氣をつける事や。第一にも関連す

や」「何でもないよ！」と答えるといつこく聞く。皆たいへんし
ているので新入があると何とかにやと聞くのである。そして「答」
を聞くと安心するのだが……。私が答えないから頭に来て
どなったり『独房やし政治犯や。左翼か。へ平連否赤軍や』「お
い乗つ取りか！」と騒いでいる。それで俺は「ここに入ったら喜
べるが、充分に身体を中心で動かすことや。第三に調べに対しては、
何も肩肘はある必要ない。笑ってすませ、今にみでおれ」と笑って
おればいいのだ。『張れ！』の言葉に従つてブタ箱生活を考えた。
朝七時起床。掃除を充分に丁寧にし身体を動かし、洗面
を丁寧にし、冷水摩擦を行なう。食後、人工衛星を体操。
十時頃から本を読む。又は取り調べ。近房との話。七時
半八時半頃ねる（実際は十時頃）。
たら笑つて黙ってしまった。……案の定、チンコロが居た。奴は

俺にさかんに話しかける。やれ「前に七房に神代の中川が居たよ。」
ブタ箱生活は人工衛星を中心て読書、他方との話及び担当とのや
列車妨害や、ブシト系とか言っていたよ。」「君はべ平遠が労働者
が」「俺の弟は大谷大で『』等々。直哉、俺のことはどうも
分らないが、別の件でチシロをやった。食後に煙草を吸わせ
京拘に再び帰った時は、かつて京拘に入った時よりは太っていた。
このダメ箱は大きい。百人を入れるというのだから。そして先

— 44 —

にも述べた「懲罰房」と共に留置場の上に、剣道場が在るのだから全くたまらぬ。朝からやれ剣道大会とかで、ドンドンやるのだ

近づくを占め、暴行が二割、軽犯罪（ワイセツ）が三割、その他割。

から。全くブタ箱の人間は文字通りブタだと思っているのだろう。先の「懲罰房」と共に頭上の剣道場についてヤカマシタ文句をいつた。「俺たちは人間や、ブタと違うのやせ、くそも小便も出やしない。ノイローゼにして殺す氣か！廃止しろ！」と連日抗議したら「設計上ミスがあつて只今検討中」「本部指定道場で、ここではどうも……」の一点ぱり。さかんに抗議して「剣道」をやっている時、二階の者は房の外に出し、体操、洗濯をやらせる事にした。連日、大声で、俺を始め、皆で抗議するものだから、担当も泡をくっていた。「君のおかげで、皆が文句をよう言うよくなつた」とき。

それから、ここには被告が多い。大体、當時、四割が被告である。三十人いたら、十二人位が被告だ。全く代用監獄の乱用には目をみはる。起訴後、何の証拠もないのに、ただ前科があるとうだけで、何十日もおかれている人が多いのにはびっくりした。

俺が出る時、四ヶ月の人が一人、一ヶ月～四ヶ月五人。二〇日～三〇日六人。二〇日～三日六人。三日以下六人のような状況であった。やはり年令では、二〇才代と四〇才代が多い。そして前科の多い人ははじめての人の対比が大きい。窃盗が、四割から半分だけや。この人は西成に労働組合が存在し、労働者の街一西成を、又、つくもを誇りにし、労働者は強いぞ」と言つていた。

につかれて、検事すら「お前ムショで死ぬぞ！」という人を、うすい夏着の今まで秋冬を冷たい日の当らぬ留置所ですごさせるというのだから。然も裁判においても、一回の判決も殆んど一回ぎりであり、警察一検察一裁判所が一体になつてゐる事を語つてゐる。俺は、鉄窓ごとに権力の不当を告発し、刑事課長を捕まえて抗議する／そして自分の持つてゐる下着をこつそり手渡しするだけや。この人は西成に労働組合が存在し、労働者の街一西成を、

△暴行▽

殺人をはじめ福原地区をかかえる兵庫署はかなり多い。十九才の少年が二十九才の警官を刺殺した。その少年が入つて来た。仲々不敵なツラをし、平然としており、取り調べにも「十年以上行くのだからタバコをすねせる」と要求していた。山口組の根強

つかまえて「コラ若いの 分つていてるのか！」「もうむちやくちややつてこますぞ！」「中国でもソ連でもいい。日本にやつてこないかなあ」「いくらボリでも俺らが根性いれたら勝つぞ」「俺の眼の黒いうちにみせてやるぞ！」等々と若いボリに集中攻撃。彼はこちらをにらみながら何も言わずに退散していった。

△輕犯罪一ワイセツ罪▽

福原地区をかかえているからか知らぬが多い。オヤマから売春婦、いやがらせ強姦、エロファイルム等々種々の人たちが三泊から

一週間ぐらいの期間で出入がはげしい。ちょっと感じたところではないかなあ

は、刑事共のスケベエを逆に反映しているかどうか知らぬが、ささやかな性関係についてもすぐパクッていく方向が感じられた。彼はこちらをにらみながら何も言わずに退散していった。

△政治関係▽

い大きな力を感じさせた。所内では「國の兵隊を殺つたのだから」ということで「ガソバレ」の声さかん。「國の兵隊をやつたといつて次から次にペクられていっているが、又少年が十年以上も行

くというが……逆だったらどうなるのや！」「昨年、学生が三人の警官によつてなくなり殺されたというが、全然起訴もバクられもしていない。それなのに逆にやつたら何十年も入るのだから矛盾している。」

「三十六年頃の釜ヶ崎の暴動も労務者を人間とみな

ある。そしてこの人達は部落出身者であつたり在日朝鮮人だった。五〇才近い人が多く（もちろん若い人もいた）戦後二十五年の内、二十年近くムショというのだからね。誰も本当に悪いことをしたなどは思っていない。警察はこれらの人達を売つて生きている。そしてペクラレると警察に何ヶ月も投げこまれ確実に何年かのムショ暮らしである。先月の中川裁判長のやり口を聞くと「窃盜」関係にも同様にひどいとの事であったが、権力共は、とにかく前科を作りだし、前科者はスグ、バクッテ、次々と前科をつけていくのである。累犯加乘なんていうのはその定型や。「大森さん。私は西成や。西成のつくもや。部落出身なんや。」と名のったその人は、俺と仲良くなつた。眼で話が出来るよくなつた。

彼はもう起訴されてから一ヶ月近くも投げこまれてゐる。別件や。ところが証拠は一切ないのに「お前、シャバに一年半もいて、一月ということはないだろ、出せ」の一点ぱり、やれ、ウソ發見器にかけたり、拳銃の裏「まあしばらく入つておれ！」と何十日もむすのである。もう五〇才近い年令で、青いムショ暮しと労働

り入っていた。」九・三〇入管斗争で、三人の若き戦士が入った。七・八・九号と呼ばれていた。三日も一週間で出て行った。皆、元気だった。色々と情報を聞く。又お互いに励まし合う。学生が入ってくるというので少しばかり例によつてさわがしくなり、三人が入つてくると自称右翼系という奴が「こら学生！」とどなつている。俺は頭にきて「うるせエ、エエカゲンニセエ」、「同じように警察にパクられているのにいがみ合うまい」と言つたら、「それはそやけど、君四十三年の十一月羽田に行つたけど学生もひどいぜ！」と言つた。「羽田斗争に参加していたのか！」と聞いたら「いや、見に行つていたのだ！」とさ。「じゃ分らないだろう。」するとヤクザの者が「学生はようやる。はなし聞いたら分る。黙秘で頑張るのやから。俺らと同じや。ガンバレ」という。声が全体の動きを制していった。当分の間はなしがつづいたが、五年前に比べやはり支持は大きい。「九州でも学生はガンバッテいたぜ！」「西成でもポリは学生の方がこわいと言つていた」

「ガンバレ」等々……
△在日アジア人・民・等に在日朝鮮人△
が一ヶ月の間に三、四人入ってきた。港の町神戸を反映か。出入国管理法違反、登録法違反ということで、十日も二十三日間留置されていた。日本に両親も兄も居るのに、戦後たまたま朝鮮に

帰つたというだけで日本に在留しない。そこで箱詰めにされた密入国してきて日本で生活をしていたら、ある日、突然警察にパクられる。又「手帳」をもつていなかつたというだけで、留置一。起訴・未決一ムショのコースをたどる。「彼のお母さんはそれは大森さん。あいつら情もなにもない奴らだ。お母さんはそれっきり黙つてしまつたよ。同じ人間で、何でお母さんと一緒に暮せられないのや。本当に矛盾している。『本当にいい人だったのに』韓国に強制送還か！でも笑つて、又笑つてくるといつていたよ。いつの日か一緒に、大阪でのもうや！」と別れた！」

△留置所と警察▽

警官にも階級斗争が反映している。三池斗争の本質をみた氣がしたのは「俺も三池の第一組合員だった。第二組合とやりあつた。けど負けた。そして警官になつたのや。飯の為や。昨年は学生とやりあつたよ」。そういう警官の言葉であり、その現実だった。俺のいる間にも「酔っ払い」がなぐられて傷をしたとか。二・三日前入ってきた若い者が「わあ、ここにいたら殺されるわ！」と叫び、皆で文句。抗議したら、刑事が連れ出して帰らせてさなかつた。そしてその日は一日、警察官について話がほづんだ。率先日サン

ケイにのつていたよ。七〇%以上の人人が、警察を嫌つているよ。」「そりや当然や、奴等、俺らを人間と思つていなかつたのだから」「奴ら人殺しや」「金持は全然つかまえず、コン泥ばかり捕まえてやがる！」「あいつら金持の番兵や、人殺しの番兵や」等々。そうして「検房」というのか、夜寝る前にあるが、これがひどい。キン玉を握つたり、パンツのヒモをひっぱつたりしやがるのだ。又、衣服なんか散らすのだ。俺は本当に頭に来てドナリ付けられた。お前の名前は何ていうのだ？」「人をブタと思っているのか？」「先ずかたづける」「次にあやまれ」「そうしなければ房内には入らぬ」と大喧嘩をし、ついに今後やらせぬ事にした。

△泰野の都知事選挙立候補△ 野が、都知事に出るといふニュースが伝わってきた。「初め自民党けしからんと言つていたのに」「ボリヤデカの親玉や。瞞すの専門や」「あいつ、とおるかも知れぬ」「ボリ公を使って美濃部の選挙を妨害し、テメエの選挙違反なんか何ぼでも出来るのだから笑いが止らぬ」「何でも新日鉄の社長なんか応援して絶対、勝つと言つていてるぞ！」「えらいこっちゃ。学生なんか、もう何もできなあなあ」「あの川藤みたいに殺されるぜ！」「ムショでも選挙で自民党に入れると、皆ハイハイ言いながら共産党に入れている」等々、半日間、話が所内ではずんだ。

帰つたというだけで日本に在留しない。そこで箱詰めにされた密入国してきて日本で生活をしていたら、ある日、突然警察にパクられる。又「手帳」をもつていなかつたというだけで、留置一。起訴・未決一ムショのコースをたどる。「彼のお母さんはそれは大森さん。あいつら情もなにもない奴らだ。お母さんはそれっきり黙つてしまつたよ。同じ人間で、何でお母さんと一緒に暮せられないのや。本当に矛盾している。『本当にいい人だったのに』韓国に強制送還か！でも笑つて、又笑つてくるといつていたよ。いつの日か一緒に、大阪でのもうや！」と別れた！」

△留置所と医者▽

兵庫署は署長と個人的に親しいらしく近くの小原医院から小原医師がやってくる。オレは風邪をひいていたのでかかつたら一六一〇円（初・三〇〇円、往・三五〇円、検査一八二〇円、薬料一四〇円）も取られた。当然タダだと思っていたのに。生田署はタダとか。これ又問題になつた。昔タダと思って受けたら金を取られるのでびっくりしていた。そこで金を払わぬことにした。しかし、俺のはデカが既に納入していたので文句を言うと三五〇円の往診料だけを返してきた／全くふざけている／その次は皆その医者をボイコットした。なんでも関学生は一万円以上の金を取られたとか。

このようにして、ともすると俺一人だけ、独房に入れて、特別視、隔離しようとしたが房の隔たりもなく、留置所内に色々の話をし皆で警察に抗議し、その場限りかも知れぬが、一つ一つ変えていった。そして「おふくろが差し入れてくれた果物も、俺一人で食べるのではなく、「房内に果物は入らぬ」というのを、おしゃべりで分けて食べた。そうしている内に、所内の雰囲気が変り、次第に担当に注文したり、文句をいう者が出て「おトク、八号言つてやつた老子」と報告に来る者も出てきた。又「何でもやはり言わんとあかんなあ」と係長にくつてかかる者も出ってきた。担当

左ちは、「早く大森、行ってくれ！」と盛んに言うが、「仲々おるぞ！」と逆に言つたりした。十月十三日、京拘に移る日、本当に皆から「大森さん、頑張れ」「頑張れ」「身体に気をつけて」の声におくられて、少し名残りおしかったが神戸をあとにした。

係長いわく「よく喧嘩をしたが、行くのか、行くとなるとなつかしいなー」「名物男やつたからなあー」とき……。

△とりしらべという近代的拷問▽

九月十日から九月二十九日までとりしらべし、三十日に起訴。

実際は、九月十一日、十二日、十四日、十六日、十七日、十八日、十九日、二十一日、二十二日、二十四日、二十五日、二十六日、二十九日の十三日間、一日二時間三〇分から三時間程度のとりしらべ。一日、十三日まではカンズメ。十日デモで、調べなし、十一日、黙秘調書をとつた。十二日（土）検事調べ「大森君か、黙秘

やな／終りや。」と座るヒマもなし、オレが「あなたの名前は？」ときくと、「俺も黙秘や」とさ。あとで聞くと、根来という奴で東京にも応援に行き、松下講師と空間論でやりあつたとか。そして裁判所に行つた。この勾留裁判がまたあざけている。一書類を眼の前でベラベラめぐりながら（検事がつい先にみていた書類やから当然）、すぐ「事件について何か！」「住所、氏名？」と聞いて、「うたがうに充分やから十日間勾留します。」「それから

接見禁止にします。」とさ。「あなたの名前はなんといふのか。」と頭にきたから聞いた「岡田」とさ、「岡田高さんか、年老りやな！」とにらみつけ、「弁護士に連絡するようになつたのつまつせ。」といつて出た。

十一、十二日の二日で「黙秘は決して得にならぬ。」「黙秘はわるい。と三宅教でも開いたらどうや。」といつたら笑つて黙つてしまつた。十四日（日）、「竜野に行つたか、時限火炎ビン等々を黙秘調書でとつた。そして今日はさかんに、組織について

「君らの組織どうして分つたのだろうね。」「全部分つているのや。」「君はもうこわれたバケツをひとりで支えているのだ。」

「え、もうジャジャもれや。」「証拠もあるのだ！」等と。オレは「心配してもらわなくとも結構、おたく、余り悪いことしたらあきまへんぜ！」と笑つた。午後、警察の指導官の柳沢という人がやつてきた。要するに目付け役や。平野さんと、佐藤君から差し入れ。弁護士に会う。「烽火」を差し入れてもらうことにした。

十六日、十七日、十八日と屋からやつてきた。身上関係や住所について調べてきて、それをネタに「取り調べ」をする。「君に家族関係がら何もやるつもりはないが、妹のことを考へる。」とや

つてきた。そしてやれ家族がどうこうのといふから、「京都のデカも同じことを言つたが、学校で習つたのか！」といつたらだまつてしまつた。又「オレのことよりも、あんたの家族のことを考えろ！」といつた。十九日検事しらべ一默秘調書をとる。場所（竜野）を知つてゐるか。浜田、石川、中川、藤田、大森を知つてゐるか。保釈について。等々。奴は、「君、内ゲバはどう思うか」ときたから「あんたらの内ゲバはどうや」といつたら、「私ら國家公務員やからね。」とき。又「烽火、むつかしいことを書いているね。私ら分らん。」とき。「君のようにおとなしそうな人が革命家か、世の中分らん。」とき。俺は「根来さん、あんた、こんなことばかりしたらあかんぜ。」といつたら「唯憲法にのつとつてやつているのだ。」「ドロボーもしらべているのだ！」といふから、「ホンマカイナ！」とにらみつけたら、横をむいていやがつた。検察庁で桑野という公安部長にローカで出くわした。二十一日～二十五日の間は、中に休みをはさみつつ、とにかく「警察は、合法的な運動は大いにやれ」というが、枠外の非合法があんのや。日共のようにうまくやれ。」等々とざかんに言うので、「警察公報」にでものせろ！」といつたら笑つてしまつた。ヌブンドの組織・政治局について「三谷、アツミ、荒、右田らのうち、荒派がのびているよ／アツミも右田もあかんよ／

△とりしらべという近代的拷問▽
九月十日から九月二十九日までとりしらべし、三十日に起訴。
実際は、九月十一日、十二日、十四日、十六日、十七日、十八日、十九日、二十一日、二十二日、二十四日、二十五日、二十六日、二十九日の十三日間、一日二時間三〇分から三時間程度のとりしらべ。一日、十三日まではカンズメ。十日デモで、調べなし、十一日、黙秘調書をとつた。十二日（土）検事調べ「大森君か、黙秘やな／終りや。」と座るヒマもなし、オレが「あなたの名前は？」ときくと、「俺も黙秘や」とさ。あとで聞くと、根来という奴で東京にも応援に行き、松下講師と空間論でやりあつたとか。そして裁判所に行つた。この勾留裁判がまたあざけている。一書類を眼の前でベラベラめぐりながら（検事がつい先にみていた書類やから当然）、すぐ「事件について何か！」「住所、氏名？」と聞いて、「うたがうに充分やから十日間勾留します。」「それから

△とりしらべという近代的拷問▽
九月十日から九月二十九日までとりしらべし、三十日に起訴。
実際は、九月十一日、十二日、十四日、十六日、十七日、十八日、十九日、二十一日、二十二日、二十四日、二十五日、二十六日、二十九日の十三日間、一日二時間三〇分から三時間程度のとりしらべ。一日、十三日まではカンズメ。
ムシヨについて「ムシヨ暮し二十年～十五年の人たちが多く、ムシヨについて、「はなし」がはづんだ。ムシヨぐらし二十一年の人は、「戦前と戦後直後はひどかった。赤い服、青い服をきせられたときにはないたぜ／また昭和二十年には、「大刑」も毎日四～五人死んでいって浅香に埋められていつた。今はこりやこりや。しかしどんだんきつくなつてきているなあ。」と言つていて。ムシヨは全く支配の縮図であるノムチとアメノ特警と看守の「ムシヨ」では「やれ、声が大きい／とか「壁にもたれた」とか「座り方が悪い」とか「パンツを勝手に洗濯した」とか、やれ「担当に独房に入れ、運動もラジオも何もなく、唯三度のメシを食べるだけ、長いので二ヶ月から五十日間、短くて一週間等々から、減食（半分にへらされる！）とか、もっとひどいのは、特別房という

地下房（あるムシヨでは、天井の高さ九〇センチ足らずで、半径七〇センチの円形の房で、窓も何もなく、冬はせん風櫻をまわし、夏は一〇〇ワットの電灯数個を照らす、そして上にフタがあつて、あるいは横に小さな穴があつて、看守はのぞくのである。）に入られる、皮手錠をはめられ、便もたれ流し、食事もごちメシを犬が食つまされ、皮手錠をはめられているのだから）、お茶は筒をとおして流れるのを口でうけとめるという仕打ちをうける、これらの、「懲罰」のドゥカツにもかかわらず、必ず暴動から、担当をなくなどの事件は見えない。もし担当にケガでもさいたら（あるムシヨでは、クソを担当にくわせたりしていた）、裁判に（懲罰の上に）かけられ、刑が加重されるのだと逆に担当が、懲役の者を殺しても（これは実際に在る）、ケガをさしても、裁判にならず、正当防衛といふことになるのだ！

「報償」……ムシヨの労働は、そのムシヨのある地方の産業によつて異なる。都市付近だと、鉄鋼・熔接関係から、自動車修理関係の比重が大きい。大阪の堺・港西の工業地帯はムシヨの人たちの重労働の血と汗が流れている。かつて、佐野安造船には、多くのムシヨの人たちが働いていたとか。又現在は近代化され直接現場に行かず、ムシヨの内で下請工場を作っている。しかし未だ人の嫌がる鉄道の保線作業には、直接現場に狩り出されている。現

在でも近鉄と南海の保線作業を行なつてゐる。そしてこの重労働の賃金は一日七〇円平均という（食事代等を勘定しても全くあざけている）。五年働いても十万円足らず、渡されて（懲罰等があるとドンドン引かれ数万円になる）。「へくろうさん。」△大刑△で二億五千～三億近い業務成績とかで、各ムシヨ毎の競争や工場毎の競争があり、一定の強制割当を達成すると、テレビをみせて流れのを口でうけとめるという仕打ちをうける、これらのか、やれ映画をみせるという制度になつてゐる。

そして官警放送（ラジオ）を流し、本は大衆文学という金と血縁のはなし。日曜日は、マスコミ連中がやつてきて、毎日・朝日新聞の論説委員とか、坊主などがやってきて説教。医者もひどい。

たとえば「腹がいたい！」といったら「そうか、腹をみせろ！」といつて、腹のヘソのまわりに赤チンをつけるのだ！しかし、これらのはなしを聞くと、はなしをしている人たちが、これに耐えてきたのだと思うと楽しくなつた。「オレも行くよ！」

△万博の目玉の奴一広島刑務所や」「だけど、大森さんなんか工場に出さないよ！」一緒にやれたらなあ」とき。△以上△報告△にならぬかも知れないが、思いつくまま書いた。△かんじんの△取調△の報告は、先に△京都△の件で報告したのと同じようなもので、わずかになつた。

編 集 後 記

納喊6号改題「地下水道」が完成した。ことごとく手工業性のワクをもつていた救援活動を蜂起の陣型構築に再編せねばならない。我々は、武装斗争や軍事に対する清算やしりぬぐいのために救援会運動をやつてゐるのではないかと確認しておこう。反戦・全共斗運動が生み出した諸々の救援会を荷つて斗つてゐる人々と共に共同作業として今後「蜂起の後方陣地」を形成しよう。我々はプロレタリア階級の利益を武装組織、勢力の防衛として設定し、身をもつて斗いぬこう。第二戦線としての救援会は、武装斗争の時代には生きることは出来ない。敗北主義と市民主義に対する斗いを展開しよう。敵権力にパクラること解体されることを前提に、又あれやこれやの失敗や政治警察との斗争を個人の思想や決意に任ねることをもつて救援活動を軽視する傾向と斗いぬこう。「地下水道」は、七〇年代の救援会運動をめざすものとして役立つように育てて行きたいと思う。

関西救援会機関誌 地下水道（呐喊改題） 5号
1970年12月10日発行 価格 200円
編集・発行責任者 村 越 真 介
送 稿 先 高槻市下田部町1-20-20
連絡先 久松気付 村越宛
現代史研究会センキ社
TEL 大阪 921-1457